



「ざしきわらし」

あなたの家には「ざしきわらしがいるよ。」と言われて育った「私」。大人になって帰省したとき、そのことを自然に納得する。家庭の暖かさを見つめ直す短編小説。（『現代文A』）

自由を学ぶ

国語の授業ははじめとても退屈だった。

そのだらしない気持ちのままに古典、古文、漢文をまじめに勉強しなかったことをさすがに悔いているが（歴史の勉強と古典の勉強が直結していることを、もっと簡単に説いて図解してくれる先生がいたらどんなによかっただろう、と今も思う。当時の頭の悪い私には、どの時代のどういう時代背景からその文章が生まれて来たのかを想像する能力がなかったのだ。今だったらそれをいっしょに学んだら無限に興味広がるだろうことがわかる。自分の体験から、時代背景と創作が切っても切れない関係にあることがリアルにわかっているからだ）、自分は家に帰れば放っておいても自分の好きな本を読むことができるのに、なんで抜粋だったり短編だったりするものばかり、短い時間で細切れに読んで感想を言ったりしなくてはいけないんだろう、と思っていた。

でも、確か中学生のあるとき、私は教科書に載って

私は昔から読むのだけは早かったので、すぐ追いついて読み終わった。

多分、あわてたことがより純粹に作品世界に私を入らせる要素だったのだろう。斜めにかまえているひまがなかった。

そして、これまでとは違う空間に自分がいるのを感じた。

人を信じて待つ時間の長さを、そして信じて待つ人がいてもたどりつくことを疑う自らの心を、善良な人々や友情の中に潜む欺瞞を、短時間で私は全部体験していたのだった。

その前にももちろん、文学の偉大さや、文を読むことで心が別の世界に行くことを私はたくさん体験していたはずだ。

でも、太宰治とそのとき私は初めて「目が合った」そんな気がした。

一度目が合ってしまったら、そのあとはなにかが通じ合うものだ。私は太宰治の小説を片っ端から読んで、こんどは全部自分なりに理解することができた。

特に短編が好きだということもわかったし、著者がかなり弱っているときでも、精神の輝きや牙えがところどころに顔をのぞかせることもわかった。

人間はとても弱いもので、これほどの才能を持っているにも健全に生き抜くことはむつかしいのだという世の厳しい真実もなんとなく理解できた。



よしもとばなな

一九六四（昭和三九）―小説家。
東京生まれ。主な作品「キッチン」「TUGUUM」「アムリタ」など。

いた太宰治の「走れメロス」を読みながら、居眠りしてしまった。

「今からしばらくはそれぞれがこの小説を読みましよう」という感じの時間だったと思う。

たまたま寛大な教師だったので、ゆつくりと読む時間を与えてくれた。

居眠りして目を覚ましたら、まだみんなは熱心にその小説を読み進めていた。

私はその前に「人間失格」を読んでいて、そのときはまだ「色気がある美しい人がそれゆえにゆがんだ人生を送らざるをえない」ことの深みが理解できず、なぜ主人公はこうなっていくのかを身体感覚として近くに感じることはできなかった。だからさっぱり太宰治の才能がわからなかったのだ。

なんて傲慢なのだろう！ でも中学生なんてそういうものだと思う。

とにかく目を覚まして、まだ目の前に教科書の文字があつたので、猛然と読みはじめた。

本の中には空間があり、その中を読者は著者にリードされながら自由に泳ぐことができる。ちょうど、すぐれたゲームをやっている感覚や、俳優が役を演じるときの感覚と似ていると思う。自分はそこでどうふるまいたいのか、それにかかなり近いところに主人公はいるのだと思う。そして主人公が迷い、道を誤り、苦しむとき、いつのまにか自分の中にいるもうひとりの自分がいっしょにその感情を味わう。たとえば、実際の自分がそうしないことだとしても、主人公にすでに寄り添っているのだから自然に自分以外の世界を体験できる。それはもしかしたら別の国、別の時代のことかもしれない。共通点は人間であるということだけで、年齢も性別もなにもかも違うのかもしれない。それでも、なぜか理解できるのである。

そのことのすごさは、いくら感動してもしたりないように思う。人間であるというだけで、ある程度同じものをみんなが持っているのだ。それは名作や古典だけにある要素ではない。人の営みが描かれていて、自分が確かに「目が合った」と感じられるのであれば、必ず私たちはどこか違う場所に連れて行かれる。その喜びが紙であれ電子書籍であれ、私たちにいつでも与えられている。まだ読んでいない本で読みたい本はまるで海のように膨大に目の前に広がっている。そう思うとあせるけれど幸せを感じる。



王朝びとは春を愛し、中世では秋を好む……。日本人の季節感が、美意識に裏打ちされて息づいていた古典文学の世界への誘い。

(『古典A 物語選』)

古人の眺めた月

『古今和歌集』に布留今道の、
日の光敷し分かねば石上古りにし里に花も咲きけり

という歌がある。無官で逼塞していた石上並松がにわかに五位に叙されて、日のあたる存在となったことを祝ったもので、「日の光」は帝の恩寵を意味する。また、日光は人間すべてにとってこの上ない恩恵であって、太陽は希望や理想の象徴といつてよい。では、月は人間にとってどんな存在であるとされてきたのだろうか。

まぶしくて容易に直視できない太陽と違って、月の光はやさしいから、人は昔から夜空の月を眺めてきた。そしてそれを美しいものと感じてきた。愛する人がいれば、月夜の美しさ・すばらしさを彼または彼女と共に享受しようと思った。

月夜よし夜よしと人に告げやらば来てふに似たり

の身にして (『古今集』在原業平)

と、失われた恋の嘆きをもらさざるをえない。

それに限らず、漠然とした秋思はもとより、さまざまな悩み・苦しみを月に訴えかけ、慰藉を求めようとする。

月見れば千々にものこそかなしけれわが身ひとつの秋にはあらねど (『古今集』)

と歌う大江千里には歌人のポーズのようなものが感じられなくもないが、保元の乱の悲惨な現実をまのあたりにした西行が、

かかる世に影もかはらず澄む月を見るわが身さへ恨めしきかな (『山家集』)

と歌ったのは、やり場のない感情を月につける他、どうしようもなかったからである。

空に照る月はどこでも同じ月だから、地上のどこに行っても、空を仰いで「あの人もこの月を見ているのだろうな」と、遠くにいるいとしい人、なつかしい人を偲ぶことができる。そこでそれらの人との別れに際して、月を引き合いに出して、自分を忘れないでほしいと相手に訴えた、『拾遺和歌集』所載橘忠幹の、
忘るなよほどは雲井になりぬとも空ゆく月のめぐり逢ふまで

待たずしもあらず (『古今集』読人しらず)

というのは、王朝初期の無名歌人のつぶやきである。月の面に認められる薄い影は、古代人にさまざまな幻想を描かせた。

天の海に月の船浮け桂槎かけて漕ぐ見ゆ月人をとこ (『万葉集』作者未詳)
とは万葉びとが抱いた美しい幻想だが、やや時代が下ると天女や月宮殿を想像するようになる。

このようなことから、古人にとって月はたしかに美の象徴であったといえるであろう。

しかし、それだけではない。たとえ美しい夜を共に過ごしても、人間の愛情はうつろいやすい。それに対して、満ち欠けを繰り返しつつも、月は変わることなく、地上のこととは一切関わりなく、空を照らし続ける。そのような月を眺めて、愚痴な人間は、

月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもと

という歌は、『伊勢物語』では、東国へ旅する主人公の男が、道中から都の友だちに送ってきたものと語られている。このような発想の歌は少なくない。

月見という行為も、古人にとっては、単に月の美しさを味わいつくしたいというよりは、月に触発されてあえて感傷や懐旧に身を委ねようという意味を持っていたと考えてよいのではないだろうか。『平家物語』の「月見」のくだりでは、平清盛が福原遷都を強行した年の秋、やむなくこれに従った貴族たちは、数々の名所(歌枕)や旧都となった京の都の月を見に行つたと語られている。それらの土地は歴史や物語・歌といった文化伝統を背負っているの、そこに射す月の光はこよなく美しかったのだ。

そして、信仰に生きた西行や明恵は、明月に悟りの境地や世界に遍満する光明を見いだしていた。

いかでわれ清く曇らぬ身になりて心の月の影をみがかん (『山家集』)

あかあかやあかあかあかあかやあかあかあかあか (『明恵上人歌集』)

古人が月を眺めて得た精神的なものはこのように多様であった。現代のわれわれはそのことをほとんど忘れてるように思われてならない。



くぼた じゅん
久保田 淳

一九三三(昭和八)―。国文学者。東京都生まれ。主な著書『日本人の美意識』『隅田川の文学』『富士山の文学』など。



「それでいいです」

「それでいい」と「それがいい」はどのようにニュアンスが違うか。わずかな助詞一つで表情ががらりと変わる日本語の難しさについて、軽妙に綴る。（『国語表現』）

先生は子どもを トラウマから救える

精神医学の世界にも、そのときどきの「トレンド」がある。学会などで注目されるトピックということだ。その中のひとつが、「幼小児期の複雑性トラウマ」だ。これは、大きな災害や事故による単発的なトラウマではなくて、親による心身への虐待が繰り返されたり何らかの原因で養育者との良い関係が築けなかったりしたときに、じわじわと与えられる慢性的なトラウマを指す。こういった複雑性トラウマの後遺症は、その子どもが成長する過程あるいはおとなになってからも本人を苦しめ続けることが、このところはつきりわかってきたのだ。

この問題に詳しい精神科医・杉山登志郎氏によると（発達障害と子ども虐待、第108回日本精神神経学会学術総会シンポジウム、二〇一二年）、親からの虐待によりこのような慢性的なトラウマを与えられた子どもはさまざまな症状を呈し、そのつど専門家から違

支障を抱えながら、「うつ病」「社会不安障害」など従来の診断基準にはあてはまらないというケースが少なからずある。これまではそういう人たちには便宜上、「適応障害」といった診断名をつけつつ、何が原因で環境とのミスマッチが起きるのか、と探っていくことになる。

そういうケースで過去の話を聞いているうちに、「これは今の問題と関係ないとは思いますが」と断りながら、「母親がきょうだいの中で自分だけを無視していた」「叔父がやって来て誰もいないところからだをさわった」といった養育放棄や性的虐待が語られることがある。私自身もそれまではその話を聞きながら、「たしかに不幸な過去だけれど、それといまの職場不適応は何か関係があるのかどうか」と頭を悩ませていた。それが先の杉山氏の見解を聴いてから、「この人たちは複雑性トラウマの後遺症で、職場や家庭で人とうまく関係を作ることができないのだ」と気づき、そこに焦点をあわせて治療を進める必要があると考えるようになったのだ。

とはいえ、もう30代、40代になった人たちに子ども時代の親との関係を語ってもらい、「それはしんどかったですね」「でもその後、よくがんばりましたね」



かやま
香山リカ

精神科医。主な著書に「いまどきの『常識』『し』がみつかない生き方」など。

った診断を下される場合があるという。中には、発達障害に非常に類似した症状が出現し、注意欠如・多動性障害と診断されるケースもある。杉山氏は言う。「子ども虐待そのものが、未治療の場合に幼児期の愛着障害、学童期の多動性行動障害から青年期には解離性障害および素行障害に展開してゆくという広汎なそだちの障害を呈し、広義の発達障害症候群と言わざるをえない臨床像を呈するという事実が気付いた。」そして杉山氏はこれを「第四の発達障害」と命名する（第一は知的障害と肢体不自由、第二は広汎性発達障害、第三は学習障害と注意欠如・多動性障害のいわゆる軽度発達障害）。

私はこの仮説を知って、はっと目がひらかれた気がした。診察室にやって来て「職場でミスが多い」「夫婦関係がうまくいかない」「子どもを愛することができない」など訴える人の中には、生活や仕事に大きな

と共感し、励ますのは容易なことではない。語ることでかえってそのときのトラウマがよみがえり、症状が悪化するケースさえある。

そういうとき、いつも「私が学校の先生だったら」と考え、その職にある人をうらやましく思う。先生は、いま実際に親との関係がうまくいかなかったり以前から虐待に近い扱いを受けたりしている子どもたちと向き合っている。そういうときに親以外の誰かが「きみには長所もたくさんあるよ」「あなたはきっと人の役に立つおとなになると思うよ」と支えるだけで、心の傷はかなり回復する。自分を見てくれる人がいる、評価してくれる人がいる、というだけで、トラウマがトラウマとして定着する前に消えていくことも期待できる。

学校という現場で子どもとふれ合う先生たちには、「みなさんはトラウマ後遺症から子どもを救う魔法の力を持っている」と伝えたい。そのために必要な言葉やテクニクは、それほど多くない。「だいじょうぶ」「あなたにはできる」「そして子どもが何かを達成したときには、「お、やったじゃない」と評価してあげる。こと。精神科医にはない力を持っている学校の先生を、私はとてもうらやましく思っている。

いま求められる「国語表現」の力

大修館からまったく新しい「国語表現」の教科書が登場しました。表現力をどうとらえるか、教科書にどのような思いを込めたか、どんな授業をしてほしいか……。編集委員が語り合いました。

今求められている表現力とは？

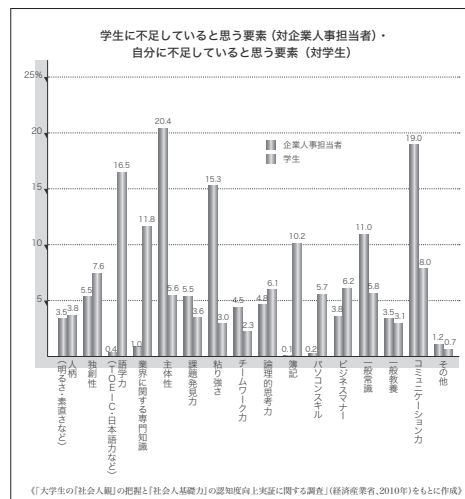
金子◆ 最初に、今求められている表現力とは何かということから話していきたいと思います。今回の学習指導要領の解説で、表現する能力を高めることはこれからの生活に必要不可欠であると示されました。また、経済産業省から「社会人基礎力」という考え方が提唱されています。そこには想像力や課題発見力、発信力など、かなり表現に関わる能力が入っています。これらを現場の先生方はどのようにご覧になっていますか。

三宅◆ 私の勤務校は就職する生徒がとて多いので、外部から就職指導の講師を呼んで、生徒に話してもらったことがよくあります。すると講師はいつも、会社が一番求めているのはコミュニケーション力です。

金子 守
入部明子
初谷和行
三宅義藏
高草真知子

ニケーション力なんだと言います。しかし、生徒にはそういう意識がほとんどない。教科書の78ページにまさにそのテーマのグラフが載っています。普段の授業の中で、人の話を聞くこと、自分の考えを伝えることが、いかに社会で大切なということを、生徒に意識して伝えていかなければならないと強く感じています。

入部◆ そうですね。社会人の能力として、「コミュニケーション力のある社員が一番最初に出世する」とも言われています。ただコミュニケーションと



グラフを読む④学生と企業の意識のギャップ (教科書78ページ)

力をつけることと表現を楽しむこと

金子◆ 「あ表現だ、上手に話さない、きちんと書きなさい」と言っても、すぐにはできないですよ。書き方を学んだり、繰り返し練習したり、といったことは、授業の中できちんと扱う必要があります。

三宅◆ ただ「力をつけるぞ」と言うだけでは、生徒のやる気を引き出すことはできません。私は年度のはじめに授業の大きな流れを話しています。「一年の後半にはおもしろい活動をやらかし、前半はちょっと頑張って表現力をつけようね」と言っています。すると生徒も頑張ってみようと思えるようになります。その視点からいうと、この教科書はとても扱いやすいんですね。第1部が「表現力を培う」、第2部が「表現を楽しむ」という二部構成になっているので。

初谷◆ 第1部と第2部に分ける構成にするというのは、編集会議の山場だったと思います。僕としては産みの苦しみだと感じていました。学校の実情

によって、扱いたい教材の種類も時期もかなり異なるだろうということは、教科書作りの初期の頃から話題になっていました。最初は、やさしい活動から総合的な活動へという順で並べるのが一般的かと思ってたんです。でも、何がやさしい活動かというと、一概には言えないんですね。苦しいんだか、あつて、わかりやすい二部構成にできました。

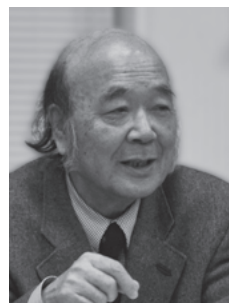
金子◆ この教科書は、順番通りに進めることもできるし、現場の状況に応じて順序を変えたり、必要な教材だけピックアップして使ったりもできる。非常に柔軟な構成にできたと思います。

書くことの基礎・基本

高草◆ とはいえ、まずは書くことの基礎的な力をつけたいと思う先生方は多いと思います。この教科書はそれを非常に大切にしました。「1書いて伝える」には、表記や係り受け、話し言葉を書き言葉に直すなど、繰り返し練



大修館書店『国語表現』(図表305)



金子 守
(かねこ まもる)
元筑波大学大学院教授

的に言語的なコミュニケーション力をつけさせる必要があると思っています。

初谷◆ 私が昨年まで勤めていた高校では、国語以外の教科も含めて、表現活動に力を入れていました。しかし、振り返って考えると、国語の授業ではどうしても従来のような読解型の授業が多く、表現の活動が小中学校に比べて少なくなりがちだったと思います。今は短大に勤めています。学生たちを見てみると、表現することが嫌いではないのですが、じつくりと考えて表現するとか、表現の方法を練り上げるとか、そういうことについてはあまり学んできていないな、ということをもっと強く感じます。



入部明子
(いりべ あきこ)
つくば国際大学教授

いるそうなんです。訓練って大事なんだな、と思いました。

金子◆ 知識をまとめるだけじゃなくて、この教科書では実例を多く取り入れて、実際に活動させる。「量の上の水練」ではなくて、繰り返し活動として練習することで、活用する力を育んでいくことを心がけました。



初谷和行
(はつがい かずゆき)
貞静学園短期大学講師

る。具体的な手順を示していることは大きな特徴だと思います。

「書けた」という体験の積み重ねを

三宅◆ 練習ということでは、小論文と同じです。小論文というところから書けないとあきらめているような子がけっこういるんです。でも、この教科書通りにすれば書けるよ、と言いたいですね。実際に書くことが苦手な生徒でも、指示通りにやってみれば、書ける。すると、「ああ書けた」と実感できる。この「ああ書けた」という体験の積み重ねで、自信も出てくるし、やる気もどんどん出てくるわけです。例えば34、35ページの見開きですが、ここに理由や反対意見を入れ込んでいくと、自然に六〇〇字の小論文が書ける。

金子◆ そんなんですね。書き方の説明は小学校でも中学校でも学んできたわけですが、ではその説明に従って書けるかという書き方。この教科書で示したのは、書き方から実際に書けるまでをつなぐ具体的な方法です。

高草◆ 小論文と並んで、今は大学受験の場合でも就職の場合でも、自己PRがかなり注目されています。ところが生徒はともかく苦手意識をもっていて、どうやっていいかわからない。でも、第3単元「自己PRと面接」のレッスン1、レッスン2に取り組みと、一つの型がわかってきます。まず、自分のPRするものを抽象的な言葉で述

る。具体的手順を示していることは大きな特徴だと思います。

金子◆ そんなんですね。書き方の説明は小学校でも中学校でも学んできたわけですが、ではその説明に従って書けるかという書き方。この教科書で示したのは、書き方から実際に書けるまでをつなぐ具体的な方法です。

高草◆ 小論文と並んで、今は大学受験の場合でも就職の場合でも、自己PRがかなり注目されています。ところが生徒はともかく苦手意識をもっていて、どうやっていいかわからない。でも、第3単元「自己PRと面接」のレッスン1、レッスン2に取り組みと、一つの型がわかってきます。まず、自分のPRするものを抽象的な言葉で述

べる、そして自分の体験から具体的に補強し、最後にまとめを入れるという感じ。

三宅◆ 教科書の指示が一つ一つ具体的ですからね。

高草◆ そうなんです。だんだん自分のよさを客観的に見ることができるようになって、自信をもって発表できる

ようになるんです。

入部◆ 小論文も自己PRも、生徒たちにとっては切実な問題です。私たちはそれらを特にしっかり扱える教科書にしたいと思いました。大学受験にすぐ役立つように、あるいは社会に出る準備を早くできるように。生徒や先生方のモチベーションを考えた、実用的

3 構成メモを作る

次のような段階構成・構成メモを作ろう。

おわり	なか	はじめ
自分の意見の理由のうち、最も説得力のあるものを書く。 しかし、 という面がある。 だから、 と考えるのである。	反対意見について書く。 たしかに、 という面がある。 また、 という考え方もある。 それは、 だからだ。 自分の意見の理由を、理数書くといふ。	問題提起し、それに対する自分の意見を述べる。 映画は、自宅の家庭用テレビでDVDを再生して鑑賞するのがよいが、映画館で鑑賞するのがよい、かという問題について、私は と考える。
自分の意見の理由のうち、最も説得力のあるものを書く。 しかし、 という面がある。 だから、 と考えるのである。	反対意見について書く。 たしかに、 という面がある。 また、 という考え方もある。 それは、 だからだ。 自分の意見の理由を、理数書くといふ。	問題提起し、それに対する自分の意見を述べる。 映画は、自宅の家庭用テレビでDVDを再生して鑑賞するのがよいが、映画館で鑑賞するのがよい、かという問題について、私は と考える。

何について書くのか、問題提起をする。そして、それに対する自分の意見の理由を述べる。はじめの意見の理由のうち、最も説得力のあるものを、自分の意見の理由の次に書く。自分の意見の理由のうち、最も説得力のあるものを、自分の意見の理由の次に書く。自分の意見の理由のうち、最も説得力のあるものを、自分の意見の理由の次に書く。

「2 小論文・レポート入門」紙面の一部
(教科書34・35ページ)

な作りになっていると思います。

読むことが表現を支える

高草◆ 実用的ということでは、授業で使える教科書ということも目指しました。表現の活動は、生徒によって作業のスピードに大きな差があります。この教科書には読み物教材が豊富に掲載されているので、早く作文が終わった生徒には読み物を読ませておくという使い方もできます。

金子◆ 「表現への扉」ですね。表現のためのヒントにもなるし、他の教材と関連づけて指導の多様化も図れる。何より読み物としてもおもしろいものが揃っていると思います。

初谷◆ メディアリテラシーを扱った第4単元の後に掲載しているのが、荻上チキ、保岡裕之のメディア論、テレビでもおなじみの人気ジャーナリスト池上彰のメディアリテラシー入門、さらには爆笑問題の太田光のエッセイです。これらを読ませるだけでも、生徒はメディアについての考えを相当



深めることができると思います。

日常生活につながる表現活動

高草◆ 三宅先生のお話にあった「おもしろい活動」を、この教科書では第2部にまとめました。私は「こちら悩みごと相談室」を授業でやってみたくて、進路に悩む女子高生に対しての回答を生徒に書かせる教材ですが、生徒はとても意欲的に取り組んでいました。相談者の親友やおばあちゃんになりきって書く生徒もいたし、カウンセラーの立場で考えた生徒もいました。生徒が楽しめる活動を授業に入れると盛り上がるし、作品を綴じて配ったり、いい文章をクラスで紹介したりすると、それがまた生徒の刺激になるんですよ。「あの人こんなすごい文章書けるんだ」って。

三宅◆ 本当にそう思います。堅い勉強と、楽しめる活動とで、授業の主役になる生徒が入れ替わるんです。小論文のときに小さくなってたような生徒が、第2部の例えば「言葉で遊ぶ」み



三宅義藏
(みやけ よしろう)
千葉県立生浜高等学校教諭

たいな活動になると、すごい能力を発揮する。おもしろい作品に投票させると、最高得点の作者は、決まって意外な生徒ですよ。

高草◆ 生徒をはめる種が増えますよね。

金子◆ 「表現を楽しむ」の活動は、扱う範囲をうんと広げて、日常生活の中にたくさんある、身近な素材を教材にして、作品を自分で作っていくわけです。これこそまさに、考えや表現の力を総結集する必要がある。これこそが社会生活や生涯につながっていく表現活動だと思っています。そういう意味で取り入れた内容に、法教育もありましたね。

入部◆ 「開廷/模擬裁判」ですね。非

常に社会にリンクした教材になったと思います。民主主義国家の根幹をなす、国民が司法に参加する裁判というものを模範的にいうという教材ですから。模擬裁判の台本の一部が入っていて、これを読むといった基礎的なところから始めて、実際に論理的に意見を述べ合う。これは後々、社会に出たときに大いに役立つ力になると思います。

金子◆ こうして見ると、先生が好んで取り上げそうな単元と、子どもたちが喜んでやりそうな活動の、両方が入っていますね。それに、受験向けの教材と就職向けの教材と。いろいろな高校生のことを意識して、一通りが網羅されている感じがします。

表現活動の評価を考える視点

初谷◆ 第2部は「楽しむ」ということで本当にバラエティ豊かな活動が盛り込まれたと思います。第1部については、僕は評価のことを特に意識しなくてはいけいない、と思っていたんです。もつと言うと、具体的な教科書の

作りとして、教員も生徒も、今学んでいることは何か、学習のねらいは何か、ということが意識できるように示したいと考えていました。第1部の下段の「ポイント」には、活動で気をつけるべき点が具体的に書かれています。生徒は、ああ、ここではこういう力がつくんだということがわかるはずですよ。さらに、「チェック」欄を設けて、生徒が自分で学習のポイントを振り返ることができるようになりました。ぜひ授業では意識しながら取り組んでほしいと思います。

金子◆ 計画を立てて実践した後から振り返る、という、いわゆるPDCA(計画→実行→評価→改善)が大切だと思います。そのためにはどうやって評



高草真知子
(たかくさ まちこ)
麗澤大学・麗澤中学高等学校
講師

価するかということが重要で、指導資料には評価規準例を詳しく具体的に掲載します。「表現は評価が難しい」とよく言われますが、何をもとにどう評価すればよいのか、という評価の方法を示したいと思っています。

生涯使える表現力を

金子◆ 教科書の教材以外のところにも活用してほしいところがたくさんあります。例えば、付録に「正しい表記のための用字用語ミニ辞典」を入れました。

三宅◆ これは助かりますよね。生徒が特に間違えそうな例がたくさん載っていますので。

金子◆ この教科書の特色は5、6ページの「教科書を活用しよう」で一覧できます。教科書に盛り込まれていることが、国語表現という科目に限らず、日常生活や社会生活における必要性にすべてつながっていくことがわかんと思います。例えば、「あがらないために」から「話すときのツボ」という人

前で話すときの心得について書かれた読み物教材が引けたりするんですよ。**三宅◆** これはただの索引じゃないですよ。見ているだけで、力がつきそうだなということも、日常生活で役に立ちそうだなということもわかります。

高草◆ この教科書が家に一冊あったら、すごく便利だと思います。手紙の書き方も載っているし、文章を書くときのヒントもたくさん載っているし。

金子◆ 情報化が進む中で、日常生活においても言語によって理解し表現する必要性は高まっています。生徒にその必要性を実感させて、自分なりに問題や課題を解決していくための力をつける教科書であってほしいし、それが実現できたと思っています。ぜひ多くの高校で表現の活動に取り組んでほしい。すぐには効果が出ないかもしれないけれど、生涯学んでいくという態度、意識をもたせる。そういう気持ちで表現というものをとらえていただきたいと思っています。

(二〇一四年一月二六日 大修館書店会議室にて)



表現力の現在と新しい『国語表現』

かねこ まもる
金子 守

元筑波大学大学院教授
大修館『国語表現』編集委員

国際化、情報化がますます進展する中で、どのような能力や資質が求められているのか。

経済産業省は、社会人に求められる基礎的・基本的能力「生きるチカラ」の十二の要素のうち、「課題発見力」「計画力」「創造力」「発信力」「傾聴力」などを挙げている。また、中教審が提示した参考指針で「学力」のうち、特に汎用的技能として、「コミュニケーションスキル」「数量的スキル（＝シンボルを活用して分析し、理解し、表現することができ）」「情報リテラシー」「論理的思考力」「問題解決力」の五つを挙げている。社会人を対象とする調査でも、課題に向けて働く思考力・判断力や創造力、論理的に筋道を立てて思考し、表現する能力、その基盤となる国語力などが求められる能力や資質の上位に上げられている。課題解決的な学習をする中で、とりわけ表現する能力を高めることが必要不可

欠な社会的要請であると言えよう。

大修館の『国語表現』は、学習指導要領「国語表現」のねらいや内容等を踏まえ、今求められている表現力やこれからの社会生活の中で生きて働く表現力を育むために編集されたものである。本書は、第1部「表現力を培う」、第2部「表現を楽しむ」の二部構成になっている。

第1部は、「1 書いて伝える」「2 小論文・レポート入門」「3 自己PRと面接」「4 メディアを駆使する」「5 声とコミュニケーション」「6 会話・議論・発表」の6単元から成る。各単元には、書く力や話す・聞く力を基礎から養うためのレッスンが、3〜6程度置かれている。各レッスンは、実例を多く採り入れ、そのねらい・活動の流れ・学習のポイントや課題（＝「トライ」）、ねらいを確認す

る（評価する）「チェック」等で構成されている。また、表現のためのヒントになる文章や資料を「参考」として載せたり、単元にふさわしい読みの教材を「表現への扉」として載せたりして、学習の深化と多様性を図るとともに、他の単元でも使えることを考慮に入れた。量水練で終わることのないよう、具体的な活動を通して、表現に関する知識・技能を習得し、活用する力を育むよう配慮・工夫した。単元名でもわかるように、「書くこと」と「話すこと・聞くこと」のバランスをとり、進学と就職という将来の進路を考慮に入れながら、指導現場が強く求めている事項について多くのスペースを割くよう配慮した。さらに、指導の力点の置き方や計画などに応じて、いくつかの指導パターンが考えられるよう配慮し、自己学習力とともに自己評価力を養うために、自己評価や相互批評等を学習に適宜取り込み、それを自己表現に活かすよう工夫した。

第2部は、13の教材で構成されている。表現すること自体を楽しむ、言語生活を豊かにするためのアイディアなどを紹介している。

「1 言葉で遊ぶ」では、多種多様な言葉遊びを楽しむ、音の響きのおもしろさや意味の広がり

のかさを感じ、自らも作品を創る誘いとした。「2 詩歌を楽しむ」では、古くから親しまれてきた詩歌や漢詩などの魅力を味わう楽しさを知り、題材を見つけて創作したり、漢詩の翻訳に挑戦したりするような学習も設けた。また、「3 魅力的なポスターを作ろう」「4 『わが町自慢』のパンフレット作り」「7 『私の虫類図譜』を作ろう」では、コピー、写真やイラストなどの画像を効果的に使って、人の心をつかみ、読者を引きつける作品作りの手順やアイディアを示して、学習がスムーズに流れるようにした。「5 働く人にインタビュー」「6 みんなで作ろう国語辞典」「10 演説合戦にチャレンジ」「12 開廷！模擬裁判」「13 劇を作ろう」など、みんな協力して、魅力的で新鮮なテーマに取り組み、言葉と表現の豊かさや深さ、確かさを味わえるよう配慮した。また、「8 エッセイを書こう」「9 パロディー物語を書こう」「11 こちら悩みごと相談室」など思考力、想像（創造）力を駆使して楽しむ活動もあり、いずれも自らが表現して創り上げるものばかりである。

指導資料には、参考として、すべての教材に評価基準（基準）を示した。これも工夫の一つである。



社会人基礎力を支える『国語表現』

いりべあきこ
入部明子

つくば国際大学教授
大修館『国語表現』編集委員

現代社会において「国語表現」に期待されるのは、一人の社会人としての表現力の育成であり、国家の一市民としての表現力の育成であり、グローバル社会の一員としての表現力の育成である。実社会や国際社会が「国語表現」に寄せる期待は大きい。その背景に、社会人となった新卒者のコミュニケーション力の不足や、国際社会における論理的な表現力の不足といった現実がある。

経済産業省が「大学生の『社会人観』の把握と『社会人基礎力』の認知度向上実証に関する調査」を実施したところ、企業側が不足していると思う、学生のコミュニケーション力の数値が19・0%であるのに対して、学生自身が不足していると思うコミュニケーション力は8・0%とその半分にも満たなかった。また、二〇〇〇年から経済協力開発機構(OECD)が実施している学習到達度調査(PISA)の読解力調査の結果を見ると、二〇〇六年の参加57

カ国中15位から、二〇〇九年の参加65カ国中8位に順位は上がったものの、根拠を踏まえて自己の考えをまとめる記述については、無解答の割合が高く、問題となっている。

一人の社会人として、国家の一市民として、グローバル社会の一員として必要な表現力をどのように育成していけば良いのだろうか。

1 社会人の一人としての表現力

まずは実社会でどのような表現力が期待されているのかを具体的に理解することが必要である。表1は経済産業省が提示する「社会人基礎力の能力要素」だが、「表現力」というと、「発信力」という一つの要素のみが注目されがちである。しかし、実社会が求める表現力は、「主体性」や「課題発見力」など、一つ一つの能力要素と連動した総合的な「発信力」である。大修館書店の『国語表現』の教科書では「議論して結論を出す」活動(主体性や課題発見力)や「プ

分類	能力要素	内容
前に踏み出す力 (アクション)	主体性	物事に進んで取り組む力
	働きかけ力	他人に働きかけ巻き込む力
	実行力	目的を設定し確実に行動する力
考え抜く力 (シンキング)	課題発見力	現状を分析し目的や課題を明らかにする力
	計画力	課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力
	創造力	新しい価値を生み出す力
チームワーク で働く力 (チームワーク)	発信力	自分の意見をわかりやすく伝える力
	傾聴力	相手の意見を丁寧に聴く力
	柔軟性	意見の違いや立場の違いを理解する力
	情況把握力	自分と周囲の人々と物事の関係性を理解する力
	規律性	社会のルールや人との約束を守る力
	ストレスコントロール力	ストレスの発生源に対応する力

表1 社会人基礎力の3つの能力・12の要素
(『社会人基礎力のススメ』 経済産業省 2006年)

レゼンテーションの工夫」(発信力)などを通して、実社会が期待する社会人としての表現力を育成することができると期待されている。

2 国家の一市民としての表現力

平成二一年五月に直接民主主義の根幹をなす裁判員制度が始まったが、裁判員法では「裁判員は評議に出席し、意見を述べなければならない。」(第66条)

としており、根拠を踏まえ、冷静な判断のもとに心証を他の裁判員や裁判官にわかるように意見を述べる表現力の育成が求められている。そのような表現力育成のためには、実践的な言語活動が必要不可欠であるが、大修館書店の『国語表現』では「開廷! 模擬裁判」として本格的な裁判審理を扱っている。臨場感あふれる表現活動で、国家の一市民としての気概を生徒に体感させていきたい。

3 グローバル社会の一員としての表現力

情報を収集し、分析し、判断して発信する力は、表1の社会人基礎力と重なる力であるが、それに加えて適切にメディアに向き合う力がグローバル社会の一員として求められている。二社の新聞を読み比べたり、あるいは新聞とテレビを比べたりすることによって新たな課題を発見するような学習や、既存メディアである新聞と新興メディアであるインターネットの情報を比べる学習もグローバル社会における表現力育成のために必要である。大修館書店の『国語表現』では、世界中から情報を収集して分析し、新たな情報を創造する表現活動として「メディアを駆使する」を用意している。グローバル社会のメディアという荒波にのめられないよう、時間をかけて学習を進めていきたい。



書くことが嫌いな生徒への小論文指導

みやけよしろう
三宅義藏

千葉県立生涯高等学校教諭
大修館「国語表現」編集委員

はじめに
小論文指導は楽しい。生徒の目覚ましい成長をはつきりと見ることができからだ。

私の勤務校は、きわめて学力の低い生徒が集まる高校である。作文を課すと、「遠足に行った。楽しかった。」など二文程度を書いて、これ以上は書けないと言う生徒もいる。それほどでなくても、文章を書くことに大変な苦手意識をもち、作文と聞くだけで嫌な顔をする生徒は少なくない。まして「小論文」となると、書けるはずが無いと初めから思い込んでいる生徒が大部分である。

そのような生徒が、二ヶ月足らずで、新聞記事について自分の意見をしっかりと論述できるようになる。なにより、小論文学習の時間を嫌がらないようになり、さあ、今回はどんなテーマですか、と、むしろ楽しむ風情で課題文を受け取るようになる。四月

当初の顔つきが、作文を極端に嫌がるものであり、書いたものがあまりに低レベルなものであるだけに、その変化が実に顕著であり、生徒の成長を明確に実感することができて、授業者として実に楽しいのだ。

もちろん、理想的なレベルまで上達するわけではなく、課題もある。ここでは、それら足りない点も含め、私の小論文の授業を紹介し、小論文指導のあり方について考える材料の一つとしたいと思う。

指導の実際 その一

小論文学習の目的については、授業当初や、生徒の様子を見ていて必要を感じたときなどに話をするが、紙幅の関係で今回は省略し、就職や進学の際の志望動機執筆や自己PRに生かせること、実生活における説得力を育むことや、コミュニケーション能

力を高めることができる、ということなど、折に触れて具体的に説明しているということだけ記しておく。

小論文指導そのものの第一歩は、小論文とは何か、を教えることだ。先生方の中には、いろいろと詳しく説明なさる方もいらっしゃるが、私は簡潔に、

小論文には、

- ・意見(結論)があること
- ・なぜそう考えるのか、筋道を立てて述べられていること

この二つの条件を満たすことが必要。

ただ教える。逆に言えば、この二つがそろっていれば、とりあえず小論文と呼べるのだ、となる。このように示してやることで、ああそれなら書けるかも、という気持ちが生徒の心に芽生えてくる。この気持ちが大変なのだ。

それなら書けるかもしれない、という気持ちが芽生えたところで、テーマを与える。簡単で、かつ、生徒にとって身近なものがよい。ここ数年、私が使っているのは、「年の初めの挨拶は、葉書の年賀状

がよいか、(携帯電話などの)メールがよいか」である。

このテーマであれば、たいていの生徒が、「意見」と「理由」を書くことができる。どうしても書けないという生徒がいれば、それぞれの「良いところ」を二つずつくらい挙げさせ、年賀状とメールのどちらがよいか決めさせた後、そちら側の「良いところ」を書かせれば、小論文ができあがる。

ここで、「おお、書けたじゃないか」とほめてやるのが肝要である。当初はほとんどやる気を見せなかった生徒も、さすがにほめられるとうれしく、何より、書けるはずがないと思いついていた小論文が書けたという喜びを味わって、次への意欲が湧いてくる。

指導の実際 その二

書けたという喜びと自信を二度ほど味わわせたら、次のステップに入る。意見に説得力をもたせる書き方である。

どうすれば説得力が増すかを考えさせるために、例えば、自分専用のパソコンを買ってほしいのだが親は買ってくれない、という状況を生徒に考えさせ



る。どうすれば親を説得し、買ってもらうことができるか。

自分専用のパソコンの必要性をいくら述べ立てても親は同意してくれない。そこで、親の立場を考慮して、「確かに家の経済事情が厳しいことはわかっているよ」とか、「お母さんは私が危ないサイトに近づいたり、勉強がおろそかになったりすることを心配してくれているんだよね」などと、親の事情や考えを理解していることをしっかりと示す。その上で、そういうことがわかっていてそれでもなおこういう理由で必要なのだ、と伝えれば、親の気持ちはかなり揺れるだろう。

ひたすら自分の意見を述べるのではなく、自分の意見とは対立する意見を紹介し、その良さも認識していることを示した上で、それでもこうなのだ、と述べることで説得力が増す。このことをしっかりと生徒に理解させ、次の構成法を示してやる。

- I 自分の意見を明示する
- II そう考える理由を述べる
- III 「確かに」などで始めて) 対立意見の良さも認識していることを示す
- IV 「しかし」などで始めて) 自説の最も説得力

おわり	なか	はじめ
五	四	三
だから、 と考えるのである。	自分の意見の理由のうち、最も説得力のあるものを書く。 しかし、 のだ。	問題を提起し、それに対する自分の意見を書く。 年の初めの挨拶は、葉書の年賀状がよいが、メールがよいかという問題について、私は と考える。
	たしかに、 という面がある。 また、 という考え方もある。	それは、 だからだ。 また、 だからだ。
	自分の意見の理由のうち、最も説得力のあるものを書く。	自分の意見の理由を書く。複数書くときよい。

五段落双括法の構成メモ表の例
(大修館『国語表現』p.34・35をもとに)

のある理由を述べる
V 「ゆえに」などで始めて) 自分の意見を再度明示する

このIからVにしたがって段落分けをすると五段落になり、冒頭と末尾の二箇所で見解を示している。この構成法を生徒にとって理解しやすく、非常に書きやすい。「年賀状かメールか」をこの五段落双括法で書かせると、たいていの生徒はしっかりと六十字程度の小論文を仕上げてくる。これは、書いた生徒自身にとっても驚くべき事実であり、反論を想定した上で自説を主張するという、いかにも小論文らしいものを自分が書いた喜びを生徒は味わう。

この、書いた、できた、という喜びこそが、自信とやる気を生じさせ、次の課題へと向かわせる。ここまでくれば、もう大丈夫。さまざまなテーマや課題文に対して生徒は積極的に取り組み、五段落双括法で小論文を仕上げて来る。

書くことが嫌いな生徒への小論文指導で大切なのは、書いた、という喜びを生徒に味わわせることである。そのためには、まずは、書きやすい「型」を教えるのが有効である。この「型」に合わせて、こ

こに「意見」を置き、ここに「理由その一」を置き、とやっていけば、どんなに作文が嫌いな生徒も、小論文が書ける。そして、書いたという喜びが味わえる。そのような指導こそが、本校のような学校の生徒には必要であると私は考えている。

おわりに

もちろん、五段落双括法で小論文が書けるようになるのは、小論文学習の「目標」ではない。構成の仕方だけに話を絞っても、生徒には、課題に合わせた構成や、独自性のある構成など、さらに高いレベルのものを目指すよう指導したい。本校の場合、なかなかその段階まで行かず、その指導方法の工夫が私の今後の課題である。

だが、書くことが嫌いな生徒が積極的に小論文に取り組むようになるところまでは、それなりに指導できるようにしたのではないかと考えている。以上の指導方法について先生方のご意見をいただければ、幸いである。



悩みごと相談に回答しよう

たかくさ まちこ
高草真知子

麗澤大学・高等学校講師
大修館『国語表現』編集委員

私の友人は、「国語表現」の時間に、新聞の「悩みごと相談」の記事を切り抜いて、それに回答を書かせるという活動を毎年行っています。その先生から、「生徒はすごく楽しみにしていて、書くのが苦手な生徒も抵抗なく書いてくれる。教科書にもぜひ取り入れてほしい」というリクエストを頂きました。そこで生まれたのが、この教材です。

「進路のことが不安で勉強に集中できない」という女子高生A子さん(十七歳)の悩みに、生徒はどんな回答をするのでしょうか。高校生にとってあまりにも現実的な悩みなので、うまく書けるか不安になり、私も現代文の授業で、この教材をもとに実践してみました。その際、「リアルな自分だと書きにくかったら、カウンセラーや祖父母になりきって書いてもいい」ということを伝えました。

★実践報告「悩みごと相談に回答しよう」

・担当Ⅱ 高校三年生二クラス(約八〇名)
・時間Ⅱ 執筆に三〇分。次の時間に優秀作品を紹介し、感想を話し合うのに三〇分。

授業で用いたワークシート

左の「悩みごと相談コーナー」の文章を読み、あなたならこの高校生の相談にどのように答えるか、考えてみよう。

- ① 読んでどう思ったか、第一印象を書きなさい。
- ② この高校生Aさんの良いと思われる点と問題だと思われる点を書き出さない。
- ③ Aさんの課題は何だと思いますか。
- ④ あなたならAさんにどのようなアドバイスを書きますか。Aさんへのアドバイスを文章で書きなさい。

悩みごと相談コーナー

進路に悩んでいる高校二年生です。これまで、犬、猫、亀、インコなど、いろいろな動物を家で飼ってきました。動物が大好きなのです。小学生の頃から、大人になったら動物のお医者さんになりたいなあと、漠然とあこがれてきました。今も、家には猫が二匹と犬が一匹いて、その世話をするのが私の日課です。大好きな動物たちに囲まれて暮らしていければ、こんなに幸せなことはありません。

先日、担任の先生と進路の話をしたとき、「獣医師になりたいなら獣医

進路のことが不安で勉強に集中できません

●相談者 女子高生 A子(十七歳)

たいことがあるわけでもありません。かといって、獣医学部のある大学に合格できる保証もありません。もし進んで合格できたとしても、大学生になって勉強についてい

学部のある大学に行く必要があるが、今の数学の成績では厳しいかもしれない。」と言われてしまいました。先生は「理系より文系のほうが向いているのではないか。」とも言います。でも、文系の大学に行って特にやりたいことがありません。父に相談したら「好きなことと仕事とは別だ。」と、さらにショックなことを言われました。動物が好きだということでは獣医師に向いていないのでしょうか。自分が本当は何をやりたいのかも、なんだかわからなくなってきました。

大修館『国語表現』p.164「こちら悩みごと相談室」より

友人が言った通り生徒は予想以上に熱心に書き、客観的に冷静にアドバイスをする作品もあれば、自分自身に言い聞かせているような作品もありました。授業が終わった後で、「こんな文章、初めて書いたから新鮮でした」「友達の文章を読むのがすごく楽しかった」とわざわざ言いに来る生徒もいて、満足感のある時間を過ごせたようです。また、他人の良い点や問題点を考えることで、自分自身を見つめ直すきっかけにもなったと思います。

ふだんの授業では目立たない生徒が、目を見張るようなユニークな作品を書いて、みんなから喝采を浴びたのいい経験になりました。その中から二つを紹介します。



〈カウンセラーになりきって書いた例〉高三男子

よく質問をしてくれました。あなたのような年頃は、大人でもなく子供でもない、いわば大人になる準備期間のようなものです。ですから、たくさん考え、多くの刺激を受けることが重要です。この点で、あなたは他の子よりも優れています。なぜなら、自分のことを真剣に考えているからです。

今、あなたは悩んでばかりで勉強に集中できないようです。でも、それは決して勉強という現実から逃げているのではありませんので、安心して下さい。しかし、あなたが今やるべきことは勉強です。勉強することで新しい考えや新たな道が開けてきます。具体的な目標は後からでもよいので、とにかく将来社会から必要とされる立派な人間になろうと思うことが大切です。そのために、今何をすべきか。そう、勉強です。将来のことを意識しながら、勉強しましょう。大人になったあなたが楽しみです。

〈親友の立場で書いた例〉高三女子

私もやりたいことや興味のあることはたくさんあります。A子さん、もっと楽観的に考えてみてはどうでしょうか。

将来はこれになる、この仕事をする、と決めるのではなく、自分のやりたいことをやりたいだけやればいいと思います。先のことなんてわかりません。私の好きな絵本作家さんは大学の農学部に行き、農業をやるつもりが、いつのまにか絵本作家になっていたそうです。いいんじゃないでしょうか。まだ志が曖昧なままでも。自分の興味のあることについてもっと深く学び、掘り進めればいいと思います。その過程でやっぱり違うかな、自分のやりたいことじゃないかなと感じることがあるかもしれません。でも、それが続いている間に本当に自分のやりたいことが見つかるかもしれません。

自分の無限大の可能性を信じてみましょう。



パンフレット製作による総合的な国語表現学習

はっがいかずゆき
初谷和行

貞静学園短期大学保育学科講師
大修館「国語表現」編集委員

1 はじめに

私は昨年度まで十年以上、高校の国語教育の現場で国語表現に関する授業を行ってきました。進路に直接関わるような小論文をはじめ、広告表現、パンフレット、模擬裁判、デイベート、映像製作、俳句など、行ってきた様々な授業実践の中から一つを紹介したいと思います。

2 授業の概要

(1) 授業名「学校紹介パンフレットを作ろう」

(2) 学習の流れ（6時間扱い）

① ページ構成を考え、役割分担をする

読み手が求める内容をイメージしながらページ構成を話し合わせ、役割分担をさせます。編集長を生徒から選出して行わせてもよいですし、教師が編集長として話し合いを主導してもよいと思います。

② 担当部分のページ構成を考える

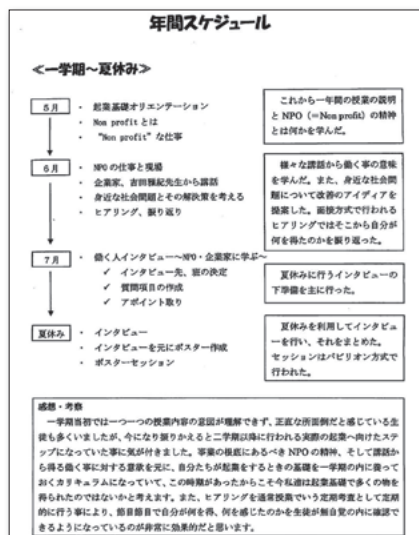
どのような情報をどのように取材し、どのようなレイアウトで載せるのかについて検討させます。既存のパンフレットや雑誌などを参考に右記の点について検討させると、様々なアイデアが生まれてきます。

③ ページ構成に関する編集会議を行う

複数の担当者で構成を統一すると読みやすいページがある一方、パンフレット全体が同じような構成ですと読み手は飽きてしまいます。それぞれが作成した構成案について説明し、重複する内容はないか、全体のページ構成は妥当かなどの検討を行わせます。

④ 取材や原稿執筆を行う

生徒や先生へのインタビュー、アンケート調査、データ収集など、それぞれで様々な取材を行わせ、



学校設定科目「起業基礎」について、学習の流れを紹介するページ

担当部分の原稿を書かせます。

⑤ 編集会議を行う

第一稿について、文章の表記やパンフレットとしての見やすさなどについて検討させます。多くの検討の視点があると煩雑になる場合もありますので、それが危惧される場合は、検討の視点を絞ると思います。

⑥ ふり返しを行う

第二稿を最終稿とし提出させた上で、授業についてのふり返しを行わせます。状況によっては、第三稿以降まで引き延ばして、編集会議を増やすことも考えられます。

3 留意点

本実践を実践するにあたっての留意点としては次のような点が挙げられます。

① 「実の場」の設定

私が実践した際には、学校の研究大会のために来校する外部の先生方に配布するための学校紹介パンフレットを作成するという設定で行いました。せっかくパンフレットを作るのですから、それが何かの形で確実に読まれること(「実の場」を作る)ことが

大切です。

② 「表現の学習」としての目標の明確化

普段行わないような表現活動ですので、生徒たちはとても楽しそうにパンフレットを作成します。しかし、パソコンで原稿を作成させるとパソコンの技術、手書きで原稿を作成させると挿絵やタイトル文字のレタリングの上手さなど、国語表現の学習における目標とは異なる点に生徒の意識が向いてしまいます。毎時間国語表現としての目標を明確化した上で、それを意識させながら学習に取り組ませる必要があります。場合によっては、ある程度までの準備を教員が行うなどして、活動を焦点化させると目標が明確になります。その際、これまで行ってきた学習、本実践で新たに学ぶことなどを整理した上で、学習の目標を立てる必要があります。

4 本実践の特徴

私が実践した際には、生徒は最初「私たちにパンフレットなど作れるだろうか」といった反応を見せました。いざ、第一稿を作ってみると、高校生や大学生が書くレポート・作文のような、文字が羅列した原稿が出てきました。そこで私は、既存のパンフ

な原稿が出来上がりました。

本実践には、企画段階においては話し合い、取材や原稿執筆段階においては、依頼の文章、わかりやすい表現(文や段落)、キャッチコピー表現、非連続型テキストによる表現、インタビュー、編集会議においては話し合いなど、さまざまな言語活動や表現における目標が内包されています。教師にとって「どれを目標にしようか」と贅沢な悩みが生まれる実践だと思っています。生徒にとっても、進路や社会に出てから必要な、話し合い、わかりやすい文章、依頼といったことを学べ、かつこれまであまり行っていないであろう非連続型テキストやキャッチコピーを含めた表現についても学べる「楽しい」実践だと思っています。

大修館『国語表現』のテキストには、パンフレット作成の授業実践も載っていますし、実践にあたって必要な基礎的な学習や関連する学習も第I部を中心に載せられています。是非活用していただきたいと思います。



こんな授業をしたい! 「国語表現」

多彩な言語活動と「日本語」の力

のむらやす
野村康代

立命館宇治中学校・高等学校教諭

■小説を用いた「反論」の授業

授業では、「インタビュー」や「他己紹介」をはじめ、CM分析の「プレゼンテーション」、「ディベート」、文学作品における視点を変えた「なりきり作文」、ブッククラブ形式の「ディスカッション」などさまざまな表現活動を実施してきました。

最も印象に残っているものは、芥川龍之介の短編小説「魔術」の中の「私」が「友人」に「かけ」をさせられてしまう場面を用いて、「友人」の発言のずるい点(論理の矛盾)を見つけ出して、反論するというものです。「劇」のように実際に二人でやり取りを交わす形で行い、生徒たちは真剣に反論を繰り返していました。

■「日本語」の特徴を肌で感じる

大修館の『国語表現』は、第1部と第2部とに大

きく分けられています。とりわけ第2部「表現を楽しむ」で、数多くの言語活動が紹介されているところが印象に残りました。「言葉で遊ぶ」の中の、日本の伝統的な「言葉」を使った「遊び」は、生徒が「言葉」に親しむことができると同時に「日本語」の特徴を肌で感じることでできる活動だと思っています。「しりとり」をはじめ、同音異義語を利用した「などなど」や言葉から立ち上がるイメージを利用してそのギャップを楽しむ言葉遊びなど、日本人が古くから日常的に親しんできたものばかりです。楽しみながら「日本語」ならではの特徴に気づくことのできる活動の紹介に、改めて新鮮な印象を受けました。

■相手意識・目的意識をもって言葉を選ぶ力

ポスターやパンフレットを実際に作成する活動の中で、何を、誰に、どのように表現すれば効果的なのか、構成やレトリックを、生徒が主体的に考え、工夫をこらして表現するような授業を行いたいと思います。グローバル化する社会においては、常に相手意識、目的意識を明確にし、状況に応じて適切な言葉を選び取る必要があります。具体的な場を想定することで、そうした言葉に対する意識を高めたいと考えています。



こんな授業をしたい! 「国語表現」

評価の工夫とメディア学習

なかだ ゆき

中田由記

東京都立両国高等学校教諭

■「書く」活動と相互評価

単元を考える時に生徒の実態や学習歴、授業者の目標を踏まえた上で、「読む」「書く」「話す」「聞く」という言語活動ができるように学習の流れを組み立てています。「書く」活動は一人一人の個性が見えて作品として残るので私自身が大切にしています。また、書いた作品をグループで読み合い、互いの作品について感想を言い合ったりコメントを書いたりする時間を授業に入れていきます。状況によってはグループの活動を生徒がクラス全体に報告することもあります。

表現活動は生徒ひとりひとりが自らの活動に取り組むので、教室の雰囲気も集中した感じであったりなごやかであったりします。生徒の色々な表情が見られて面白いです。

■「チェック」欄で自己評価

大修館『国語表現』の教科書は、生徒の学習の実態や段階に応じて多様な表現活動に取り組みるところが印象的です。レッスンごとに学習のねらい、活動の流れ、自己評価のチェック項目が具体的なので、生徒にとって活動の手掛かりがつかみやすいと思います。表現活動は内容によっては時間がかかることもあります。しかし学習のねらいが明確で、活動の手引きがイメージしやすく、生徒自身が「書けそうだ」という気持ちを持てたら、活動は主体的になります。さらにどんな力がついたのか生徒が自己評価することで、次の自分の課題が見えてきます。この教科書は、考えながら表現する楽しさや難しさをさまざまな観点から学べます。

■メディアに対する意見をもたせ、発信者に育てる

教科書には「メディア」を扱った単元や「表現を楽しむ」アイデアが紹介されています。そこで生徒の言語生活を踏まえて、メディアに対する自分の意見を持つ授業の構想を考えています。メディアの受け手側ばかりではなく、発信する側の表現活動（ポスターやパンフレット作り等）を通じて、さまざまな視点を知る機会を持たせられたらよいと思います。



こんな授業をしたい!「国語表現」

全員参加で表現を楽しむ

えびはらゆか
海老原由桂

流通経済大学付属柏高等学校非常勤講師

■採点基準を明確にした小論文指導

入試に向けて小論文が書けるようになることを最終目標として、授業を行って参りました。そのために、聞き書き、意見文を書く、自分でコラムを書く、自己PR文を書くといった順序で課題を展開しました。ある程度慣れてからは、序論、本論、結論といった小論文の簡単な構成を提示し、これを応用して、自分なりの小論文を書けるようになることを目指しました。その際に気をつけたことは、採点基準を明確にし、評価に納得した上で次の課題へ生かしてもらえるようにすることです。

■実用的な横書きの実例と自己PR

大修館の『国語表現』で印象に残ったのは、横書きの具体例が多かった点です。生徒は日常生活では、横書きにすることが多いためか、縦書きになる

と改まってしまい、書きにくく感じる場合が多いように見受けられました。まずは横書きで文章表現をすることに慣れ、その後縦書きに移行すると、書くことにスムーズに慣れていけるように思います。

また、自己PRに関するページが多かった点です。高校生にとって入試や面接は大きな関門であるので、生徒が、「自分で読んで役立てることができ教科書」として、授業外でも自主的に教科書を活用してくれるのではないでしょうか。

■内気な生徒も参加できる「言葉のストレッチ体操」

第5単元「声とコミュニケーション」を参考にした授業を試してみたいと思っています。レクリエーションのような感覚で、親しみやすい課題です。ディスカッションなどの発言しなければ成立しない授業は、恥ずかしがる生徒が多く、やりたくないという要望も多々ありました。しかし、「言葉のストレッチ体操」では全員が自然な形で参加できるよう工夫されています。「傾聴」や「聞き取り」は内気な生徒も実力を発揮できますし、「相手に配慮した断り方」「断りにくい依頼のしかた」は、生活の中でも役立ち、興味も喚起できそうです。全員が気軽に参加して発言できる課題が豊富で嬉しく思いました。



こんな授業をしたい! 「国語表現」

苦手を克服して 豊かな言語活動を

定時制高校教諭

K・H

■就職する生徒が多い学校での「国語表現」

「学び直し」が必要な生徒がいる本校では、基礎基本の定着を心がけ、社会に出て困らない力をつけることを目標にしている。具体的には本人が納得できる進路実現に繋がる学習だ。就職希望者が多く、進学でもAOや推薦で入学する者がほとんどなので漢字の読み書き、語彙、作文そして基本的な小論文指導は欠かせない。正式な書類を書くためにペン字練習帳を取り入れることもあり、個別指導に重点が置かれる。自分の思いや意見を伝える小さなコラムがやっと書けるようになった、故事成語が身近な出来事として理解できた、有名な作品の冒頭文を朗々と暗誦できた。生徒の得意気な姿が印象に残っている。苦手意識が払拭でき、少しでも面白いと感じ、頑張ろうと自ら思えるような授業になるように気を

配ってきた。(生徒にはどうだったか?)

■付録も充実した、使える教科書、

これまでの既存の教科書は一部しか使えず、教材はあちこちから探してきて持ち寄り、仲間の先生と学習プリントとして作ったものを主に使用してきた。今回の大修館『国語表現』を見て、現場にとってありがたい、使える教科書、だと感じた。授業がすぐにでも展開できる内容が、具体的に豊富に盛り込まれている。巻末の付録も充実している。用字用語ミニ辞典はとても役に立ち、生徒が自学自習しやすい。原稿用紙の使い方(縦書き・横書き・基本ルール)も一目瞭然で授業外でも活躍する。

■基礎を大切にしつつ朗読や劇に挑戦

「表現力を培う」を活用して基礎基本の力をつけることが第一だ。教科書にいろいろな例や問いがあるので、それをもとに生徒の実態に合った学習プリントを作成して授業を進めていきたい。新たに挑戦したいものとして本格的な朗読や劇がある。小中学校が工夫して生徒を動かす授業をしているので、朗読は予想以上に積極的に行う。生徒が得意だと感じるものを取り入れて、言語活動を少しでも豊かにしていきたいと願っている。



Q 「こころ」で生徒の興味関心を持続させるには？

「こころ」はぜひ生徒に読ませたいと多くの教師が思っている。だが、授業時間をそれにいくらでも当てられるわけでもないし、あまり長いと生徒も飽きてしまう。明治の時代も実感しにくい。悩ましいところである。何か工夫はないものか。

島根県・47才男性、他

A 門倉正一

元東海大学教授

長編小説は教科書では当然抄録になるので、作品全体を、あるいは収録部分だけでも、事前に（家庭で、あるいは夏休みなどに）読ませておくとはいっても、多くの生徒にそれは期待しにくいのが現実。いきなり教科書で始めるしかない。

「こころ」全体の理解を期待するのは無理。〈恋する女性〉がいて、その人を自分の

親友も恋していたということを知ったとき、本人はどんなことを考え、どんな行為にでるか」とまとめられる小説であることをはじめに生徒に明言して、考えさせる。いわば、〈三角関係〉のドラマという一点に絞って授業を進めることにしたらどうか。「こころ」は長いだけでなく、多岐にわたる問題を包みもつ複雑な小説であることを承知のうえで、これらの諸問題にも教師は立ち止まりたいが、それをいちいち扱っていたら際限がないし、なにより生徒の印象も散漫になり、いやになってしまう。

教師は精読指導になれていて、細かい指示語の内容や、人物の心理の理由づけなどを一つ一つ問わないと、学習指導にならないと考えるむきがあるが、そんな読み方をしなくても、どんな読んでもいけば小説はまあわかる、と生徒は経験的にも知っている。

もちろん、重要な問題点の箇所では立ち止まり、それを追究することは必要だ。それは、一つの段落で一つか二つに絞って、「こころ」の要の箇所に限定する。しかし、それでも相当の時間を要するだろう。そこで提案。収録部分のあらすじと各段落の内容の要約（大概のいわゆる「指導資料」にはまとめられている）をプリントして生徒の手元におく。それを活用しながら、重要な問題点に迫っていく。

〈三角関係〉のドラマの緊迫感を感じ取り、作品全体を自発的に読んでみようと思う、思わせるように授業が終わられるなら、一応授業は成功と考えることにする。

この指導方法の詳細については、大修館『新編現代文B（現B3）指導資料』に筆者が自ら執筆しています。

読んできた本、 読んでほしい本 ⑤

佐々木 一天

福島県立富岡高等学校

■地図を与えてくれるもの

「ドルアーガの塔」というゲームをご存じだろうか（頭の中に豆電球が光った方は、筆者と同年代である）。その主人公が獲得するアイテムに「ブック（書物）」というものがある。ブックを得ることで、真つ暗闇だったフロアが照らされて前に進むことが可能になる。つまり、ブックによってフロアの「地図」が手に入るというわけだ。

さて、お叱りの声を覚悟で言ってしまうが、筆者は古典を教えるのが苦手である。授業を「開いて」いこうと考えたとき、使える引き出しが相当少ないように感じるのである。佐々木の古典は、心にグッと来てくれているだろうか？ 煩悶するばかりだ。そんな筆者の心にグッと来た本が、『心



黒澤弘光・竹内薫 著

『心にグッとくる日本の古典』
(NTT出版、二〇一一)

にグッとくる日本の古典』である。中でも、防人歌「闇の夜の 行く先知らず 行く我を 何時来まさむと 問ひし 児らはも」の解説は、まさしく「目からウロコ」だった。

《竹内「しかし、行き先は筑紫とわかってるんですよ？ それで『行く先知らず』となるんですか？」／黒澤「実は、あることをわれわれは忘れてるんですよ。彼らの頭の中には、地図が入っていないということを忘れてる。』》

「そうか!! そういうことだったのか!!」。心にグッと来た。

古典を学んだ生徒に「心にグッと来た」と感じてもらうためには、生徒と古典作品の距離が近くなければならない。しかし、古典作品の世界（時代）を、現代の我々に一方的に引き寄せるだけでは足りないのだ。

我々の方から近づいていき、「古人の頭の中には地図が入っていない」といった当時の人々の生活体験に寄り添っていくことの大切さに、今更ながら気づかされたのである。

ややもすれば文法や読解に終始しがちな古典の授業を、いかに「開く」か？ この本に出会い、自分にとって真つ暗闇だった「古典の授業」というフロアを照らす「ブック」を得た思いがした。フロアの地図が手に入れば、前に進むこと、つまり、グッと来る授業を作るための第一歩を踏み出すことが可能になるのではないだろうか。

ちなみに、ブックの他にも「キャンドル」というアイテムがあるのだが、フロアを照らすためのものではない。暗闇を照らし、前に進めるように地図を与えてくれるものは、やはり「ブック（書物）」なのである。

本コーナーでは、毎回、全国のさまざまな先生方よりオススメの本をご紹介します。



大修館『現代文A』の特色

なるしま はじめ
鳴島 甫
筑波大学名誉教授

1 新設「現代文A」とは

「現代文A」は、現学習指導要領において「古典A」と対をなす科目として新設されたものである。現学習指導要領の方向を示した「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善について」(平成二〇年一月一七日 中央教育審議会答申)には次のようにある。

「現代文A」は、近代以降の文章を対象とし「古典A」対をなす科目として新設する。「国語総合」の学習を踏まえ、生涯にわたって日常的に読書に親しむ態度をはぐくむ。関連して、言語生活の在り方、言語の役割、国語の特質等についても指導し、我が国の言語文化に対する理解ができるようにする。

これを受けて、学習指導要領の「現代文A」の「目標」は次のようになっていいる。

「1 目標」 近代以降の様々な文章を読むことによって、我が国の言語文化に対する理解を深め、生涯にわたって読書に親しみ、国語の向上や社会生活の充実を図る態度を育てる。

では次に、このような「目標」を具現化した大修館の教科書『現代文A』について説明をしていく。

2 読書への誘い

小学生が一番本を読み、中学、高校へと進むにしたがって読まなくなるとい調査は数多くなされている。こういう実態を踏まえながら、「答申」中の「日常的に読書に親しむ態度をはぐくむ」を重視して、

「読書への誘い」を第一の重点項目とした。

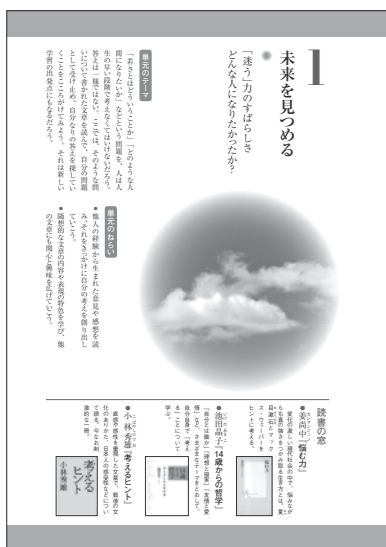
高校生に読書の必要性を実感させるためには、「読むこと」がいかに自分の人生の充実に深く関わるかを実感させることが欠かせない。そのためには、それに資する教材を用意することである。少なくとも、大学受験に備えての旧来の「読解力」をつけるための教材とは性質が異なる。ちなみに、PISAでの「読解力」の定義は「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力」とある。本教科書は、それをも視野に入れ、「読むこと」から得られる生徒の内面の成長を実感できる文章を選んだ。

それとともに、各単元の冒頭に「読書の窓」というコーナーを設けた。例えば、冒頭単元「未来を見つめる」での教材である石田衣良『「迷う」力のすばらしさ』、大江健三郎『どんな人になりたかったか?』に合わせて、姜尚中『悩む力』、池田晶子『14歳からの哲学』、小林秀雄『考えるヒント』などを簡単に紹介し、他の書物への誘いを行った。

3 近代以降の言語文化

「言語文化」は何も文学作品に限るものではない。福沢諭吉『学問のすすめ』をはじめ、多くの分野にわたっている。従って、この教科書では、「I ことばと社会」と「II ことばと文学」という具合に大きく二つに分けた。ただ、「ことばと社会」を取り上げるときには、問題の生じた時代を考慮しないわけにはいかない。そこで、そのようなことを配慮しなくてもすむ「現代社会」での問題を主として取り上げている。

ではまず、近代以降の文学から紹介しておくこと



単元の扉



にする。

小説としては、今日まで脈々と受け継がれてきている夏目漱石、森鷗外を取り上げ「漱石・鷗外の世界」という単元名のもと「こころ」「高瀬舟」をおいた。また、それ以降、現代につながる作品として、中島敦「山月記」、遠藤周作「その夜のコンヤック」を選んだ。近代以降、今日までを概観するうえで、太平洋戦争は忘れてはならないものである。そのため「その夜のコンヤック」でもある。また、現代作家の作品としては、よしもとばなな「ざしきわらし」、村上春樹「青が消える (Losing Blue)」を選んだ。現代小説への誘いでもある。

また、近代文学を観るうえで欠かせないのが詩歌である。特に、現在の「詩」を生みだした明治生まれの「新体詩」は、新しい言語文化として忘れてはならないものである。その流れをたどるものとして、島崎藤村「小諸なる古城のほとり」、ベルレーヌ／上田敏訳「落葉」、室生犀星「小景異情」、茨木のり子「六月」を選んだ。

近代以前、「和歌、俳諧」と称されていたものが、明治になっての革新運動のもと、「短歌、俳句」と呼ばれるようになったことも落とせない。短歌、俳

5 社会生活の充実を考える

「目標」中に「社会生活の充実を図る態度を育てる。」とある。「1 読書への誘い」とも絡むところではあるが、生徒一人一人が各自の社会生活を充実させていこうとする態度の育成は、国語科の目標にもなっているところである。

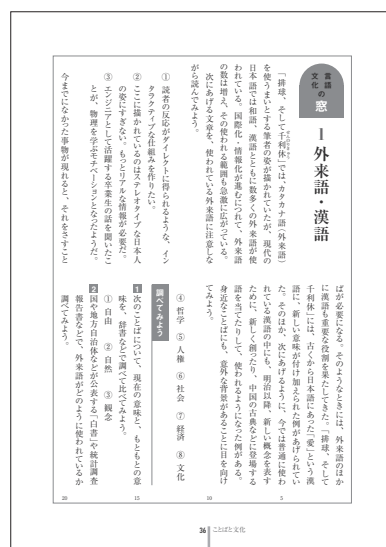
まず、自然科学を視野にいった『「自然」を考える』という単元のもと、上田恵介「ウサギの耳はなぜ長い?」と坂村健「人工の自然——科学技術時代の今を生きるために」をおいた。次に、「日本文化」など「文化」について考える「文化の理解」という単元のもと、長谷川權「和の思想、間の文化」と船曳建夫「文化と理解」をおいた。さらに、「現代を考える」という単元のもと、山田昌弘「家族化するペット」と藤原智美「『検索』時代における読書」をおいた。読書指導の充実を期してのものでもある。

最後に、本教科書の特徴でもある「社会に生きる」という単元のもと、立松和平「幸せの分量」と林望「夢を建てる人々」をおいた。社会人として生きて行く前向きな姿勢を育ててほしいとの思いからである。

句それぞれ、多くの名歌、名句が残されており、その一端の紹介にとどめるしかないのが残念ではある。以上、近代文学の詩歌を「詩歌を味わう」として、一単元設けてある。

4 生徒の国語力の向上

「答申」中に、「言語生活の在り方、言語の役割、国語の特質についても指導し」とあり、「目標」中に、「国語の向上」とある。生徒一人一人が自分の国語力を自覚的に向上させようとする姿勢を育てるためには、「答申」での指摘は重要である。そのため、「ことばと文化」、「ことばと情報」という二つの「ことば」に関する単元をたてた。前者には、川上弘美「排球、そして千利休」(カタカナ語についての自伝的エッセイ)と橋本治「敬語への自覚、他者への自覚」をおいた。また、後者には佐藤雅彦「情報の力関係」と鈴木孝夫「ものとことば」をおいた。と同時に、「言語文化の窓」という四つのコラムを設け、「1 外来語・漢語」「2 慣用語」「3 色のイメージ」「4 敬語」を取り上げた。いずれも、生徒各自の言語生活を振り返り、言葉(国語)の力の向上をはかるのに資する教材として選んである。



言語文化の窓



こんな授業をしたい！「現代文A」

「和の思想、間の文化」と『大鏡』の「大和魂」
—古典世界との架け橋として—

いまい
と
おろ
徹

福岡県立福岡講倫館高等学校教諭

■ABは難易度の違いではない

新課程説明会で、A科目とB科目の相違についてはあくまでも「性格の違い」であり、A科目が「易しい」ものではないと説明されたが、正直なところ、A科目は事実上「易しく」なると思っていた。

しかし今回、大修館『現代文A』を読んで、決して「易しく」はないと感じた。「山月記」「こころ」といった定番も収録され、評論も硬質な文章ではないが深く考えさせられるものが選ばれている。この『現代文A』は、文科省の示す「読書に親しむ態度の育成」という理念を十分に汲みつつ、従来の現代文の学習活動の水準を維持していると感じた。

■伝統文化を考えさせる「和の思想、間の文化」

「和の思想、間の文化」は、優れた日本文化論である。この教材の発展学習として「和」についてさ

らに掘り下げてみたい。「和」には日本を意味する他に、本文にもあるように「なごむ」「やわらぐ」「あえる」の読み、またこれは生徒に気付かせたいことだが「かず」と読んで「足し算の答」という意味も持っている。ここから「複数の異質なものが衝突せずに共存・調和している様」という共通のイメージが立ち現れる。これを古典との架け橋として『大鏡』の「時平伝」における「大和魂」を考えたい。

物語の語り手は時平について、贅沢を戒めるべく帝と示し合わせて一芝居打った話を紹介し、「大和魂」の優れた人物であったと賛美している。一般にこの古語は、学問的才能である「漢才」に対して、「政治手腕・処世術」の意味で説明される。「漢」との対比で「和」という訳だが、そのような才能を「大和魂」と呼ぶ意識に、先ほどの「和」の概念が重ならないか。人々を自然に自粛させる柔軟な知恵のありようが、そしてそのような知恵によって多様な人々と調和してゆく精神こそが、我が国の伝統的心性として重んじられていたのではないか。そしてそれが、多様な思想や宗教を対立させることなく共存させてきた我が国の文化を形成してきたのではないか。そんなことを生徒とともに考えてみたい。



こんな授業をしたい! 「現代文A」

読む楽しさを共有

堀 美智子
ほり みちこ

日立工業高等学校教諭

■読者への興味を広げる「現代文A」

「現代文A」という新設科目については、多様な「個」を持つ生徒一人一人が、将来にわたって使い続けていくであろう「国語」の力を、より高めていくための科目だというイメージがある。そのため、伝統的で深みのある教材はもちろんのことであるが、より親しみやすく身近に感じることのできる教材にも数多く触れることで、生徒が言語感覚を養い、読書に対しても、より深い興味や関心を抱くように指導したいと考えている。

■「お気に入り」の教材揃いの教科書

大修館の『現代文A』教科書で、特に印象に残っているのは、取り上げられている教材の豊かさである。伝統的な、生徒に是非読んでもらいたいと思う作品はもちろんのこと、高校生が、日頃考えている

ようなテーマについて、大変に興味深い文章が並んでおり、目次を見るだけで、思わず読んでみたくなる。例えば、石田衣良『「迷う」力のすばらしさ』や大江健三郎『どんな人になりたかったか?』などは、高校生の気持ちに寄り添った作品であると思う。また、一つの教材が比較的コンパクトであり、中心となっているテーマから逸れることなく読み切ることができるとも魅力の一つである。

魅力的な作品で構成されているこの教科書は、きっと数多くの「お気に入り」を揃えていることだろう。

■「読むこと」の楽しさを共有したい

大修館『現代文A』教科書を使って、できるだけ多くの作品を授業で扱い、読むことの楽しさや、読んで話し合うことの面白さを生徒と共有したい。授業を通して学ぶことは、一人で作品と対峙することとはまた違った価値がある。主体的に読みとったものを、自分の中だけに留めることなく他者と共有すること。そこから生まれる新たな気づきが、次の学びの意欲へと繋がっていく喜びを、是非、生徒たちに感じてもらいたい。教材の力も借りて、生徒たちの知りたい、伝えたいと思う気持ちを喚起し、読むことの楽しさや学ぶ喜びを育んでいきたい。



縦糸と横糸で織る「古典A」

おおくら ひろし
大倉 浩
筑波大学人文社会系教授

■「古典にしかない魅力」とは？

今回の指導要領の改訂で、「古典講読」の改善科目である「古典A」は「古典としての古文と漢文、古典に関連する文章を読むことによって、我が国の伝統と文化に対する理解を深め、生涯にわたって古典に親しむ態度を育てる」ことが目標に定められました。読むべきものに古典ばかりではなく「古典に関連する文章」が加えられています。そして、日本の伝統や文化に「関心」を持つだけでなく、より深い「理解」のために、伝統的な言語文化についての課題を設定して言語活動を通して指導することも求められました。

かつて年寄りが結婚式で「高砂」を謡ったり旧仮名の岩波文庫が残っていたりと、古典が今より身近で、高校でも古典を学ぶ時間がたっぷりあった時代には、作品をしばってじっくり読み進める「古典講

読」が、古典好きの生徒と教員のために有効に機能していたでしょう。しかし、次々に新しいものが生まれ、いく今日では古典の授業も単位数も減っており、古典にしかない魅力を生徒たちに気づかせ理解を深めさせることで、古典との距離を近づけ生涯親しむ態度をぜひとも育てる必要があります。

では、古典にしかない魅力とは何でしょうか。私たちは「歴史」の持つ時間の重みと「伝統」という現代との深いつながりだと考えます。科学技術が発達した二十一世紀の今日に、なぜ日本人はお正月に餅を食べ、節分に豆をまくのでしょうか？ サッカー女子日本代表は「なでしこ」、男子は「サムライ」と呼ばれるのはどうしてでしょうか？ すべて日本の歴史が支える伝統の力です。古典を読んでいくとそれぞれの理由や由来がわかり、もともと多くのつながりが周りにあることが見えてきます。古典の言葉

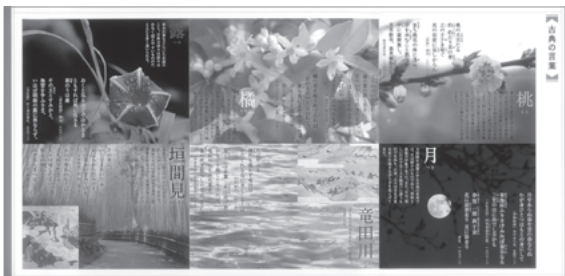
によって昔の日本人との絆がはつきりと感じられるのです。

■縦糸と横糸で織る「古典A」

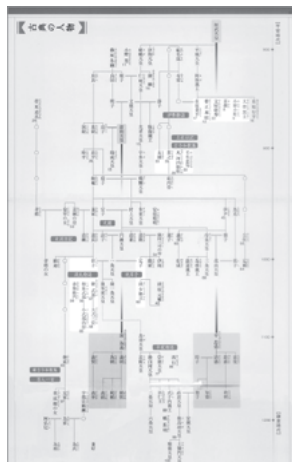
大修館の教科書『古典A 物語選』は、歴史や人物からつながる糸を縦横さまざまに張りめぐらして、古典教科書という豊かな織物を織り上げて伝統的文化への理解を準備しました。

教科書を開くと「古典の言葉」として「桃・月・橘・竜田川・露・垣間見」という六つのキーワードをビジュアルに示して、古文・漢文教材の複数の文章をリンクさせています。さらに、「関連」項目としてこのように古典全体にわたって普遍的な広がりをもつキーワードを四十六項目設定して、古文・漢文作品間のさまざまなつながりが教科書内で実感できるよう工夫しました。

さらに、折り込み部分には古典人物関係図を作りました。古典の作者や作品の文学史的な前後関係を縦糸に、同時代の人物や作品との関係を横糸に織り上げた、まさに「古典」の綾織物です。例えば「紀貫之」が九〇〇年の初めのあたりに位置しています。『土佐日記』の作者であり、友則や凡河内躬恒・



前見返し折り込みの「古典の言葉」と「古典の人物」





壬生忠岑とともに『古今和歌集』の撰者であることが一目瞭然になります。さらに、「紀」氏の流れをたどると在原業平や文徳天皇などとの縁も見えてきます。『古今和歌集』の撰進を命じた醍醐天皇は藤原忠平・時平が政治の世界で活躍していた頃の天皇であることもわかります。『土佐日記』に続く女流日記(左下のほう)の女性たちが、藤原道長の時代に生きていたこともわかり、またその時代は『源氏物語』や『枕草子』が生まれた時代でもあることがわかります。現代に生きる生徒たちにとっては生まれる前はみんな「昔」で、残っているのは「古典」ですが、歴史の流れを可視化して位置づけることで、現代への変化やつながりが実感できるでしょう。

■見やすくわかりやすい口絵

続く口絵は平安京を立体的に示す「古典の舞台」、装束や調度・住居を図解した「古典の暮らし」、一日の間の時刻の呼び方、ひと月の月の満ち欠け、一年間の季節や月の異名・行事をまとめた「古典の時間」、そして六条院を例にした「古典の植物」と、古典学習に必要な資料をテーマ別に、現代の高校生にも古典の世界が実感しやすいようにカラフルで見



充実した折り込み資料

やすくまとめています。例えば年中行事の表には「更衣」が載っていますが、現代では制服のある学校に残る「更衣」が、四月一日と十月一日の年中行事とつながっているのです。

■ジャンル別の豊富な教材

教材については、古文編では物語を中心に説話・随筆・日記、漢文編では史伝を中心に故事・逸話、詩文、思想とジャンル別に配しましたが、二単位の教科書としては多めの教材数が入っています。授業間隔も考慮して、見開き二ページの教材を多くして、一時間の授業の中で音読・解説がまとめられるよう工夫しています。もちろん物語には長い教材も多く含まれており、いっぽう『徒然草』では、兼好法師の「つづやき」のような短い章段を「断章三編」として紹介もしています。

■学習を深める「展開」「古典の窓」

各単元の扉のページにはジャンルの解説とともに、文学史の流れがわかるよう、歴史の縦糸に作品を位置づけたスケール(物差し)が付いています。また、教材の理解を補い言語活動への発展に役立つ

ような「展開」を、いくつかの教材末に組み込みました。例えば、『土佐日記』『阿倍仲麻呂の歌』の展開として、仲麻呂に関わる李白の漢詩、『古今和歌集』の歌、『今昔物語集』の説話を横糸として紹介しました。そして単元末のコラム「古典の窓」では、教材作品相互の関連を生徒に考えさせたり、スケールで書名を示した他の作品へのいざないになるような話題を提供したりしています。

■つながりを実感させる「古典に親しむ」

古文編と漢文編の間には、「古典に親しむ」として、久保田淳氏・大岡信氏・興膳宏氏の文章を置きました。古典の伝統の中にある日本人の季節観・恋愛感情、日本語になっている漢語や四字熟語に残る漢文の伝統。自分たちの生活や文化が、古典と縦糸や横糸でさまざまなつながっていることを感じさせる文章ばかりです。また、折り込みとして「百人一首」と「発句でたどる『奥の細道』」(絵は蕪村による)を入れ、和歌や発句(俳句)という伝統的言語文化を紹介し、さまざまな言語活動への素材ともなるよう工夫しています。



こんな授業をしたい！「古典A」 古典の中の「人」に 興味をもたせる工夫

おおたにあきこ
大谷晃子

茨城県立竜ヶ崎第一高等学校教諭

■「人」に着目した授業展開の工夫

「人」や「人と人とのつながり」が見えてくるように、授業のシラバスを組むようにしています。例えば、『大鏡』『花山天皇の出家』を扱った後に、出家の立役者である藤原道兼からのつながりで父・兼家が政治的勢力を持たんとしていたエピソード「兼通と兼家の不和」へ。次に、家庭人としての一面が垣間見られる『蜻蛉日記』へ。歴史上の人物も自分たちと同じだったのだと親しみをもてるように教材を扱う順番を工夫しています。また、場面がイメージしやすいように、マンガやアニメの紹介は積極的に行っています。

■ウェブ検索のような工夫「関連」

大修館の『古典A 物語選』は、作品に登場する人物の紹介がしやすい「関連」の注がついている点

を面白く感じました。あたかもウェブ上で検索するかのように、生徒が自分で他の作品を探し、教科書内をいったりきたりすることができます。便覧に匹敵するほどのカラフルな資料も、人物の造型をとらえる一助です。

■人物紹介プレゼンテーション

「○○さんって、こんな人！」という人物紹介を実践したいと思っています。小中学校以来、生徒は同じようなプレゼンを繰り返していると思います。が、それはあくまで「誰かの視点で現代語に翻訳された資料」を組み替えただけのレベル。古典を自分で翻訳し、キャラクター設定の根拠を原典に求める作業は充分に楽しめる授業となるでしょう。①古典の本文②自分が翻訳した文章③作家によって現代語に翻訳された文章④マンガ等で視覚化されたシーンを組み合わせて、パワーポイントによる発表をします。グループ作業ならば、自分の現代語訳や価値観を友人と比較もできます。教科書「安倍晴明」の単元で、『今昔物語集』の本文・夢枕獏『陰陽師』・岡野玲子によるマンガを配置しているので、何をプレゼンすべきかをイメージし真似ることができて、高校生と授業を作る時に魅力だと感じます。

こんな授業をしたい! 「古典A」

多読から知る古典の魅力

笠井幸博
かさい ゆきひろ

香川県教育センター主任指導主事

■教師自身が古典を楽しむ

古典の中に息づく思想や感情を、今を生きる生徒自身の人生に引きつけて考えさせたいと思っている。そのために、作品に表れた作者の考えや登場人物の言動に対してどのように思うかを、生徒に書かせたり話し合わせたりしながら、自分の生き方や考え方を振り返らせる活動を、なるべく多く取り入れるようにしている。

また、作品や作者に関するエピソードも生徒は興味をもつので、教材に関して幅広く情報を収集するように努めている。古典の魅力を生徒に伝えるためには、教師自身が古典を楽しむという姿勢で授業に臨むことが大事ではないだろうか。

■「古典に親しむ」と「古典の窓」

「古典A」は、古典に関連する近代以降の文章を

教材として必ず含めることとされており、大修館の『古典A 物語選』では「古典に親しむ」がそれに該当する。教材文も読みやすいので、古典の魅力や現代的な意義などを、本単元を通して生徒に分かりやすく伝えることができるだろう。また、教材を読ませるだけではなく、例えば「百人一首の恋の歌」では、本文を参考に、実際に生徒に訳詩を作らせてみたいと思う。

「古典の窓」も、古典に関して新しい視点に気付かせてくれるので、単元の導入や終末で読ませたい。■精読から多読へ

本教科書は、各ジャンルを代表する魅力的な作品が数多く掲載されているので、できるだけ多くの作品を生徒に読ませたい。そのためには、精読中心の授業からの転換を図らなければならない。例えば「大鏡」や「平家物語」は精読はせずに、現代語訳を適宜用いながら、本文にふさわしい朗読を生徒に考えさせたい。また、「源氏物語」の「御法」や「雨月物語」、「項王の最期」などは、教師による読み聞かせ中心の授業であっていいと思う。「古典A」の目標を実現するために、いい作品に多く触れることを通して、生徒に古典を学ぶ楽しさを感じ取らせたい。

教材研究の実際(4)

「矛盾」の授業に向けて③

塚田 勝郎
つかだ かつろう
筑波大学付属高等学校教諭

前回に引き続き、今回も「矛盾」（『韓非子』）の授業に向けた教材研究について考えます。

発問

授業は、教師と生徒とのキャッチボールにたとえられます。授業時間のほとんどを一方的な講義に費やし、最後に質問の時間を設けるという授業スタイルは、少なくとも高校の授業には向いていません。常に多様な発問を用意し、生徒の学習意欲や理解状況に応じて質問を投げかけ、授業の活発化を図りたいものです。

筆者の勤務校には、「体後魔六」という言葉があります。学校によって言い方が異なるようですが、「体育の直後の時間と睡魔が襲う六時間目は、生徒の集中力が切れるので要注意」という意味です。こういう時こそ、生徒を覚醒させ、授業を活発にするために、発問の出番です。

授業中の発問には、いくつかの種類があります。

- (1) 基本的な発問……内容理解のために、間違いやすい箇所や難解な箇所について、一問一答の形で行う発問。時には既習事項や脚注にあるような事項も、確認のためにあえて質問する。
- (2) 応用的な発問……他の教材にも対応できるように応用を意識した発問。
- (3) 発展的な発問……より深い理解や鑑賞を促す発展的な内容の発問。

(1) 基本的な発問の例

○「楚人」は、何と読むか。関連して、「韓人」や「魏人」は、何と読むか。

○「無_レ不_レ陷也。」を現代語訳しなさい。また、ここには何という句法が使われているか。

○「或曰、」の「或」、「其人弗_レ能_レ応也。」の「其人」は、それぞれ誰をさすか。

○「弗_レ能_レ応也。」の「弗」と同訓・同義の漢字を答えなさい。

○「矛盾」の語を使って短文を作りなさい。

(2) 応用的な発問の例

○「莫_レ能_レ陷_レ也。」の「莫」と同訓・同義の漢字を漢和辞典で調べなさい。

○「又_レ誉_レ其_レ矛_レ曰、」の「又」は、同訓の「亦」や「復」と意味がどのように異なるか、漢和辞典で調べなさい。

○「吾_レ矛_レ之_レ利、」と同じ意味で「利」が用いられている熟語をあげなさい。

○「何如」と同訓の「如何」との意味の違いを漢和辞典で調べなさい。

○「弗_レ能_レ応也。」と同じ意味で「応」が用いられている熟語をあげなさい。

(3) 発展的な発問の例

○『新釈漢文大系』等の注釈書で、教科書の文章の前後の部分を読んでみよう。

○同じく『韓非子』にある「守株」の説話を注釈書等で読み、「矛盾」との共通点を考えてみよう。

○「矛盾」や「守株」の説話で韓非子が批判の対象としたのは、何か。調べてみよう。

以上のように、基礎から発展的まで様々なレベルの発問が用意できます。発問は多く用意し、状況に応じて使い分けることで、授業の活性化が図れます。ただし、次のような発問は、安易に用いると弊害があります。

へ好ましくない発問の例

○「誉_レ之_レ曰、」の「之」は何をさすか。

この箇所では「之」は盾をさしており、問題として成り立ちます。しかし、一般的には「之」は指示語とは限りません。『之』は指示語という先入観を生徒に与えかねないので、この発問は避けるのが無難です。

○「其人弗_レ能_レ応也。」とあるが、なぜか。

答えの幅が広がります。「答えに窮したから」から「つじつまの合わないことに自ら気づいたから」まで、いずれも正解でしょう。そもそも説話の中で、架空の人物の行動の意図を問うこと自体に無理があります。

現代語訳

授業中の現代語訳の作業には、いくつかのスタイルがあるようです。

① 生徒を指名し、その場で現代語訳させる。

② 現代語訳を予習として課し、授業中に発表させる。

③教師が口頭で現代語訳する。

④教師が現代語訳を黒板に書く。

⑤授業中は現代語訳に時間をかけず、後からプリントを配布する。

筆者は、③を中心にし、時折①を織り交ぜるスタイルを採っています。生徒に現代語訳させる場合でも、あまり長い箇所は選びません。長く現代語訳させると、生徒によって訳し方が異なり、修正に苦労することがあるからです。まれに⑤の方法によることもあります。②と④には否定的な立場です。まず、②のスタイルを採らない理由を説明しましょう。筆者は予習として書き下し文の作成を課しています。「訓読は六割の翻訳」という藤堂明保先生の名言を持ち出すまでもなく、教科書の漢文を丁寧に読み、書き下し文をノートに記した段階で、ある程度の読解はできている、と筆者は考えます。加えて現代語訳まで要求するのは、高校生には酷でしょう。

④については、教師が現代語訳を黒板に書き、生徒がひたすらそれを書き写すというのは、筆者には非生産的に映ります。また、生徒に「現代語訳こそすべて」という誤った考えを植え付けかねません。説明と現代語訳をうまく織り交ぜて授業するのが理想ではないでしょうか。

な板書とは異なることを何らかの方法で示す。

○黄色や赤の色チョークの使用は、最低限に留める。色チョークの多用は見にくいだけでなく、生徒を混乱させる。真面目な生徒には、板書と同じ色数を使ってノートする傾向があることを知っておきたい。

○完全な板書よりも、意識的に不完全な板書を心がける。生徒が自分で言葉を補ったり、辞典で調べて説明を補完したりする余地を残すことも考えるとよい。

以前にも述べたように、常に生徒と向き合い、音読や発問等も交えながら進めるのが授業の基本スタイルです。そのためにも、教師が生徒に背を向ける時間はできるだけ少なくしたいのです。板書事項を厳選し、予めイメージを作っておく必要性はここにあります。

なお、「板書」という語は、分掌や机間巡視と同様に学校用語のようで、一般にはなじみがないようです。『広辞苑』では「黒板などに字を書くこと。」と説明していますが、ホワイトボードや電子黒板も「など」に含まれるのかどうか、興味のあるところだ。

指導計画

「指導計画」の語の意味するところは多岐にわたります

板書

板書の技術は、何年教師経験を積んでもなかなか上達しないものの一つです。筆者の反省も踏まえながら、注意点を列挙してみましょう。

○予め板書事項を精選しておく。板書事項が多いと、生徒はそれを書き写すことに心を奪われ、耳が留守になる。

○実際の板書のイメージを作り、授業用ノートに書き込んでおく。授業ではノートを見ずに板書するのが望ましい。○板書は縦書きで、大きくかつすぐに、わかりやすい文字を心がける。文字はうまくても、走り書きや斜め書きはもってのほかである。

○チョークをしっかり持ち、ゆっくり力を入れて書く。

○実習第一時間目の前日に、必ず教室で板書の予行演習を試みる。その際、仲間の実習生や指導の先生に、文字の大きさや字配り等について批評してもらう。同時に、自らも教室の後ろに立ち、自分の板書がどう見えるかをチェックする。

○授業が終わった後も、教室の後ろから自分の板書を確認する。さらに、ノート提出をさせる場合は、自分の板書が生徒にどのように伝わったかを確認するとよい。

○説明の都合上、文字で示す必要が出てきた場合は、正式

が、ここでは授業ごとに作成する「学習指導計画案」（以下、「指導案」と略称します）について考えることにします。

例年、「指導案が書けなくて困っています。」と悩みを訴える実習生がいます。実情を聞いてみると、教材研究が十分である場合が多いのです。教材研究を十分に行えば、その教材のどこが大事で、どこに重点を置いて授業すべきかが、自然に見えてきます。後は一時間で進む範囲を決め、その中を〈導入〉〈展開〉〈まとめ〉に分けるだけです。もちろん「指導案」通りには授業は進みません。次の時間には、前時の失敗や考え違いを修正して反映させる……、この繰り返しで現実的な「指導案」に近づくはずだ。

なお、「指導計画」には、年間指導計画、学期ごとの指導計画、月間指導計画、週間指導計画等の広義の「指導計画」と、直近の授業に備えて立てる狭義の「指導計画」とがあります。最近では広義の「指導計画」をシラバスとしてホームページに掲載する学校が増え、そのために職場がますます多忙化しているとも聞きます。教材研究と指導計画作りの軽重を常に意識し、くれぐれも本末転倒することがないように心したいものです。

この連載が単行本になります。指導実践編・板書・ノートの実例、Q&Aなどを加えて今秋刊行予定です。いつかご期待ください。

『舞姫』のすゝめ

——エリスのモデル発見で見えてきたこと

ろくそう
六草 いちか

ノンフィクション作家。大阪府吹田市生まれ。一九八八年よりドイツ・ベルリン在住。

森鷗外の『舞姫』は、まったく不思議な小説である。

誰もがその名を知っている。とはいえ、その内容を知らない人も意外に多い。読者の感想は賛否両論で、女性ウケはすこぶる悪い。『舞姫』がきっかけで鷗外嫌いになる人もいる。また逆に、『舞姫』の魅力に取りつかれてしまう者もあるし、主人公エリスの面影を胸に生涯を送る読者もいる。『舞姫』という小説は、嫌われたり憎まれたりしながら愛読される、じつに不思議な小説である。

■誰もがその名を知っている

『舞姫』の知名度の高さの理由のひとつには、高校の定番教材であることが挙げられるだろう。

『舞姫』の教科書掲載開始について編集部に尋ねたこと

「どうな、読まなかったような……」といった反応がけっこう多い。高校で習ったはずなのにどういうことだ。

これは、生徒自身の興味の持ち方もあるだろうが、授業で学ぶ度合いとも関係するのかもしれない。

私自身がその良い例だ。

私はこれまでに『舞姫』に関する本を二冊書いた。主人公エリスのモデルとなった女性の記録を発見したことで新聞やテレビに大きく取り上げられ、自身が取材を受けることもあった。その折に、「初めて『舞姫』を読んだのは？」と問われることがあり、ベルリンに住み始めてからと答えていた。高校では習わなかったと思っていたのだ。

ところが、最近になってこの記憶は誤りだと知った。当時のクラスメイトから授業で学んだと知らされた。驚く私を、時間がなく二回で終わったと彼女はフォローしたが、二回もやったのかと、さらに驚いたのだった。

私にはなんの印象も残さず通り過ぎた『舞姫』は、このクラスメイトの心を射止め、授業が終わったのちも彼女は自宅で通読した。町の様子がじつに鮮やかに描き出され、まだ見ぬ異国へ思いを馳せながら読み進めた。『舞姫』は大好きな作品となり、エリスのモデル発見のニュースに心を躍らせ、発見者の名にたいそう驚き、すぐさま書店に走ったと彼女は微笑んだ。その一冊に署名させて頂いたとき、なんとも申し訳ない気がしたものだ。

ろ、昭和三二（一九五七）年度が最初であるところ報告くだった。以来、伝統的に掲載が続き、今日では、教科書を取り扱う出版社一〇社全社のいずれかの教科書に掲載されているという。

昭和三二年時の高校生は、今年七十二〜七五歳になる。子どもが（または孫が）学校で『舞姫』を読み始めたと聞いて、三世代が共通の話題として語り合うということも大いにありえるのだ。

■意外に知らない

しかしながら、『舞姫』の内容をきちんと説明できる人は、意外に少ない。

「タイトルは知っていたが、読んだのかといえば、読ん

今の高校ではどうだろう。どれくらいの時間をかけて『舞姫』を学んでいるのだろうか。

■賛否両論

『舞姫』に感動したというのは、事物の描写や文体の美しさを指しているのだろう。しかし肝心の物語となると、その結末はとて「感動的」とは言い難い。

あるシンポジウムで、姪っ子が学校で『舞姫』を学び、豊太郎が赦せないと憤慨していると発言した人があったが、インターネット上でも同様の感想が多く見られる。

かつての私もそうだった。

高校時代の機会を失念している私が、初めて『舞姫』を読んだのは、ベルリンに住み始めてからのことだ。この町では鷗外の名を耳にすることも多いことから、一読しておこうと思ったのだった。

じつに面白く夢中になって読み進めたが、結末に至って、思わず本を放り出した。なんなんだこれは……。

自分の弱さから恋人を裏切り、悔やんでいるのかと思つたら、彼女が発狂したのは親友のせいだと恨み節。反省するどころか責任転嫁?! なんとという男なのだ。

表紙を見るのも憎らしく、本棚の奥底に押し込めた。思いつくのも癪なので、読まなかったことにした。

■『舞姫』理解の糸口

私が『舞姫』に関する本を書くきっかけは、学術的な意味合いとはまったく別のところにあった。

鷗外にはドイツ留学時代に恋人がいて、来日したという話は有名だ。その名はエリーゼ・ヴィーゲルト、娼婦だったとする説が有力だった。

その名は乗船記録に見つかっているから間違いはないが、その素性については証拠など一切ない。ところが、そんな気がするということだけを頼りに活字にする学者までいたものだから、エリーゼ＝娼婦説はまことしやかに世間に広がっていた。これがあるとき、私には引かなかった。

この女性は、たとえ時代は違っても、私の住むこの町に実際に生きていた人だ。娼婦という「職業」は、本来あってはならないこの世で最も卑しい生業であり、関係のない人をそう呼ぶことほど侮辱的な行為はない。実在の人物を根も葉もない噂で汚すなど許されることだろうか。

風評被害に遭っている人への同情や、同じ町に住む同じ女性であるという連帯感が、なんとかしてあげたいという気持ちにさせた。私のエリーゼ捜しは、ただひたすら、彼女の汚名を晴らすためで、あらゆる可能性を模索して諸機関を訪ね歩き、ついに記録発見に至ったのだった。

ところが驚くことに、エリーゼの出生や生い立ちが分か

うモチーフとその名の由来は謎として残った。

続編『それから』のエリス——いま明らかに鷗外「舞姫」の面影（講談社、二〇一三年）では、エリーゼの写真発見が目撃されたが、個人的には、来日するエリーゼを鷗外の留学仲間がエスコートしていたことは、鷗外の愛情の深さを窺い知る、嬉しい発見であった。

『舞姫』に直接関わる場所では、天方伯と親友相沢のモデルである山縣伯と賀古も、本文同様のホテルに投宿し、ロシアへも視察へ出向いていたことが確認できた。また、賀古はベルリンに長期滞在しており、エリーゼを訪ねた可能性は十分あり、『舞姫』の締めくくりの一言は賀古に向けられたものと理解するに難くない。賀古がそれを認めた記述も残っており、実際に『舞姫』が書かれたのは、賀古の帰国直後である。また、前著で残された謎について、賀古の欧州滞在中に、エリーゼの妹の産んだ子が死亡しており、その名が「エルンスト」であったことが判明した。

■『舞姫』のすゝめ

読まなかったことにしたはずの『舞姫』が、背景に秘められた真実を知ったことで、今では私にとっても大切な作品となっている。

私が憤慨した箇所については、石橋忍月との「舞姫論争」の中に貴重な一文が残っていた。鷗外はそこに、豊太郎は

るにつれ、エリーゼの面影がいかにかエリスに投影されているかが浮き彫りとなった。

また、鷗外とその周辺の人々の日記や手記をつなげて見えてくるのは、東へと帰る船の上で「陽日ごとに九廻すともいふべき惨痛」に苦しみながら、ことの顛末をしたためる豊太郎こそが、東京の自宅で小説を書き始めた鷗外の姿だった。小説『舞姫』は、エリスと豊太郎に仮託した、鷗外とエリーゼの間に起きた悲劇そのものだったのだ。

■みつかったこと

前著『鷗外の恋舞姫エリスの真実』（講談社、二〇一一年）では、エリーゼの記録発見と、帰国した彼女が鷗外の妹の証言どおり、帽子職人になっていたことが話題となったが、諸々の資料を通して、エリスの父親とエリーゼの母親の職業が同じであること、エリスもエリーゼも母親の故郷が同じであること、草稿に書かれたエリスの年齢がエリーゼの年齢に一致していること、エリーゼ母子もエリス母子同様貧しい生活ぶりであったことなどが明らかにされた。また、豊太郎とエリスが出会った場所として立地条件に合う教会が新たに見つかり、そのはず向かいには、草稿どおりの小さな中庭を持つアパートも存在した。

反面、エリーゼの父はすでに他界しており、その名も「エルンスト」とは似てもいなかったことから、父の葬儀とい

弱い人間であり、大臣に帰国を承諾したことも事実ではあるが、もし彼が病に倒れることなく、エリスの気も狂うことなく、話し合うことができたなら、豊太郎は帰国しなかったかもしれないと述べているのだ。

『舞姫』は、若き青年が初めて手がけた小説であり、血の滲むような体験の中で衝動的に綴られた作品であるから、言葉が足りず、読者に誤解を与えてしまう部分がある。しかしこの物語は、自我に目覚めた若者の現実との狭間での苦悩が主題となっており、それは現代の私たちの抱える問題にも共通するところがある。

『舞姫』を正しく理解するためには、背景となる情報を補ってやる必要があり、国語教師は大変だと思うが、高校生という多感な年齢の子どもたちが、憤ったり嘆いたりしながら豊太郎のあり方と向き合うことは、情操教育としても大変意義あることだ。

『舞姫』を教科書から除くべきという声があると聞いたが、情報が出揃った今こそ扱うべきではないか。

実際の鷗外の恋も悲恋に終わったが、鷗外は生涯、彼女を忘れることをしなかった。『舞姫』は、現実の前に無力だった青年鷗外の「いのちの書」でもある。

『舞姫』はじつに不思議で、まったく手のかかる小説である。しかし高校で学ぶに相応しい。

北原 保雄

新潟産業大学学長 『明鏡国語辞典』編者

それを畏まった挨拶文や手紙文に使おうとする意
味や使い方が分からないということになるのも自然
です。「神ならぬ身」「道ならぬ恋」「他ならぬ君の願
い」などはよく目にしますが、意味がよく分からな
いという人も多くなっています。「神ならぬ身」は、
「神様でない（人間である）身」という意味、「道な
らぬ恋」は「道ではない（正しい道からはずれた）
恋」という意味ですが、成句のようになっていて分
析することができなくなっているのでしょうか。

「ならぬ」の「ぬ」は前述したように打ち消しの助
動詞「ず」の連体形で、「一方ならず喜ぶ」のように
連用形「ず」の使い方もされます。源氏物語の例も
「ならず」という連用形の例でした。打ち消しの「ず」
に相当する現代語は「ない」ですから、「一方ならな
い」という言い方があってもよさそうな気がします。
しかし古語「なり」に現代語「ない」は付かないの
です。「なり」に相当する現代語「だ」の連用形「で」
には付くことができます。

その喜びは一方ではなかった。
ただし、この「ない」は助動詞ではなく、形容詞
です。「ある」に置き換えられます。また、「他なら
ぬ」には「他ならない」という言い方が可能です。
ただやはり制約はあり、「他ならない君の頼み」のよ
うな連体用法は少し変です。

同じ形をしています。「さびしくてならぬ夜」「寝
てはならぬ日」などの「ならぬ」は別の言葉です。
そして、これらの「ならぬ」は、「さびしくてならな
い」「寝てはならない」のように、現代語「ならな
い」に言い換えられます。この「なら」は助動詞な
らぬ動詞「なる」の未然形で、動詞「なる」は現代
語でも「なる」です。その「なる」に現代語「ない」
が付いたもので変ではないのです。会津藩校日
新館の掟、

ならぬことはならぬものです。
の「なら」も動詞で、「ならぬ」は「ならない」に置
き換えられるものです。

ひとかた
一方ならないご指導

最近来た手紙の中に、
この度は一方ならないご指導をいただきありが
とうございました。
という一文がありました。意味は分かりますが、「一
方ならない」とは言わないでしょう。正しくは「一
方ならぬ」です。

インターネットには、「一方ならぬ」の意味や使い
方が分からないとか、「一方ならずご指導をいただ
き」のように「ならず」にした方がよいのか、「ひと
かたならぬ」と「ひとかたならぬ」のどっちが正しい
のかなどという質問が載っています。

一方ならぬご愛顧にあずかり
一方ならぬご厚情をいただき
一方ならぬお世話になり
などと挨拶文や年賀状などにはよく使われています
が、日常の会話、特に若い人たちの会話で使われる
ことがほとんどないので、意味や使い方が分からな
くなっているのでしょうか。「一方」は「程度が普通で

あるさま。ひととおり。」（明鏡国語辞典）という意
味で、打ち消しの語を伴う言葉です。
その驚きようは一方ではなかった。
などと使いますが、古くからある言葉で、日常普通
の言葉としてはあまり使われないようです。「なら」
は断定の助動詞「なり」の未然形「ぬ」は打ち消し
の助動詞「ず」の連体形で、ともに古語です。平安
時代から、

ひとかたならず心深くおはせし御有様など
（源氏物語・夕顔）

のような用例があります。
語構成や意味の類似したものに「並々ならぬ」と
いう言葉があります。「並々ならぬ努力」「並々なら
ぬ思い」などと使います。「並々」の意味は「一方」
に比べて分かりやすいからでしょうか、あまり違和
感なく使われているようです。

さて、その「ならぬ」ですが、「ならぬ」は古語で
すから、日常の会話に用いられないのは当然です。

1 学校制度と連邦国家教育スタンダード

一九九一年末にソ連邦が崩壊してから二二年以上を経たロシア連邦では、社会主義体制からの転換期に行った教育改革を見直し、「大国ロシア」の復活を目指した新たな改革が進められている。二〇一二年一月には、一九九二年に制定した教育法を廃止し、新たに連邦法「ロシア連邦における教育について」を制定した。「連邦国家教育スタンダード」と呼ばれる日本の学習指導要領に相当する国の教育課程基準も改訂し、「第二世代の教育スタンダード」への移行が段階的に進められている。

義務教育は六歳半から一七歳半までの一一年間である。普通教育学校は都市部では一一年一貫制の中等普通教育学校が多いが、幼稚園と初等学校を合わせた「プログムナジア」、初等教育段階のみの「初等学校」、一〜九学年までの「基礎普通教育学校」、五〜一一年年もしくは一〇・一一学年のみの学校もある。また、「教育センター」と呼ばれる通信教育を取り入れた一二年一貫制中等普通教育学校もある。

国公立の初等中等学校の中には、ソ連時代から、外国語・物理・数学など特定の分野を深く学ぶ特別学校や特別学級が設けられていたが、一九九〇

の中等普通教育機関の教育実践において従うことが義務づけられている。このスタンダードにもとづき、ロシア連邦教育科学省から委託を受けた研究機関（ロシア教育アカデミー等）が各教科の教育内容と各教育段階修了時までに生徒が習得すべき到達目標ならびに授業時間の配分を示す基本教科課程を含む「標準基礎教育プログラム」を作成している。教科書は各出版社がこのスタンダードとプログラムに従って作成し、ロシア連邦教育科学省が実施する教科書検定を受けて合格したものが毎年度作成される連邦教科書リストに掲載される。各学校はこのリストの中から教科書を選定しなければならない。

また、教育の質のモニタリングを目的として、第九学年および第一一学年修了時には統一国家試験が行われる。試験科目は一四科目あり、ロシア語と数学が必修とされ、そのほかに二〜三科目を選択することとなっている。一一年修了時の試験の成績は、大学と中等職業教育機関の入学者選抜の際にも用いられる。

2 国語のカリキュラムの構造

現行の連邦国家教育スタンダードが定める教科構成では、日本の「国語」に相当する教科は、「言

教育段階	初等普通教育				基礎普通教育					中等普通教育*	
学年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
ロシア語	5	5	5	5	5	6	4	3	3	1	1
文学	4	4	4	4	3	3	2	2	3	3	3
授業時間の上限	20	25	25	25	32	33	35	36	36	37	37

表1：「ロシア語と文学的読み方」（1〜4年）・「文学」（5〜11年）の週間授業時数

* 10・11 学年の授業時数は全コース必修の基礎レベルの授業時数。選択科目や深く学ぶ科目として履修する場合の授業時数はこれ以上となる。

「WEB国語教室」運動

世界の「国語」教育事情 第7回 ロシア

澤野由紀子 聖心女子大学

ドストエフスキーをはじめ、数多くの文豪を輩出した国でもあるロシア。ソ連邦崩壊後、20年以上が経過した今、改めて教育の見直しが始まっています。

年代前後からは「リツエイ」と「ギムナジア」という一八〜一九世紀の帝政ロシア時代の貴族階級の子弟のための学校の名称が英才教育学校の名称として復活している。後期中等教育は、中等普通教育学校の一〇・一一学年もしくは「職業リツエイ」「テクノクウム」「カレッジ」などの名称の中等職業教育学校で受けることができる。中等普通教育学校一〇・一一学年では、標準的な教育課程のほかに、物理・数学、物理・化学、化学・生物、生物・地理、社会・経済、社会・人文、言語、情報技術、農業技術、産業技術、芸術・美学、国防・スポーツ等の科目を重点的に学ぶコースを設けることができる。

右記に加えて新生ロシア連邦では私立学校も正式に制度化されたため、学校の多様化が進んだ。その一方で、一四〇以上の多民族が住む世界一広い国土に統一的な教育空間を構築し、教育の質を保証するために設けられたのが「連邦国家教育スタンダード」である。ロシア連邦教育科学省が定める中等普通教育の連邦国家教育スタンダードは、教育段階毎に基本的教育内容の構造（必修の教科領域ごとの教育課程の構造と範囲を含む）、到達目標とその実現のための教職員の配置、財政と設備の基準を示すもので、国の認証を受けた正規

語」の教科領域のなかの「ロシア語と文学」ならびにロシア語を母語としない生徒のための「母語と文学」である。文法と正書法を学ぶ「ロシア語」と読解を中心とする「文学」（初等教育段階では「文学的読み方」は別な科目として教えられており、教科書も別々である。「言語」領域には他に「外国語」も含まれる。表1はロシア語を母語とする子供のための学校におけるロシア語と文学的読み方・文学の週間授業時数を示したものである。初等普通教育ではロシア語と文学的読み方を合わせて週に九時間の授業がある。一年生では文字指導も含めて総授業時間の45%が国語の学習にあてられている。ロシア語以外の民族言語を母語とする子供のための学校では、ロシア語と文学的読み方の時間を削減して週三〜五時間の「母語と文学的読み方」の授業にあてている。第七学年以降は他の教科領域の科目数が増えることもあり、ロシア語・文学の授業時間は次第に減っていく。

連邦国家教育スタンダードで一一年年修了時までに基礎レベルの「ロシア語と文学」「母語（非ロシア語）と文学」において習得することが目標とされていることは以下のとおりである。①ロシア語、母語（非ロシア語）の文学的言語の規範についての概念の形成と言葉の実践におけるそれらの

意義の理解、②言葉そのものの観察にもとづく自己分析と自己評価の習熟、③テキストを明白な情報と隠された情報、主要な情報と二次的な情報の観点から分析する能力の活用、④命題、概要、注釈、報告、様々なジャンルの作文の形でテキストを発表する能力の活用、⑤ロシア語、母語の古典文学、世界の古典文学の作品の内容、民族の文学および世界文学に対するそれらの歴史的・文化的、道徳的・価値的影響についての知識、⑥ロシア語、母語（非ロシア語）の表現の可能性についてのイメージの形成、⑦芸術作品の分析の過程において歴史・文化的文脈と著者の創造の文脈を考慮する能力の形成、⑧芸術的テキストにおいて様式、テーマと問題を見出し、それに対する自らの立場を口頭および筆記によって論議を展開し表現する能力、⑨芸術的作品をジャンルとカテゴリーの特色を考慮しながら分析し、情動的な個人的感動と知的理解を統合させて、文学作品に描かれている生活の芸術的描写を認識することの習熟、⑩芸術的文学の言葉のスタイルの体系についてのイメージの形成。このようにして、様々なジャンルの文学作品を読みこなす教養ある読者を育てることが目指されている。

RUS



3 文学の教材

文学の授業では、初等教育段階から一学年上下二巻で一冊二五〇頁以上もある読み方の教科書を用い、長編詩や長編の散文も数多く読ませ、基礎教育段階以降に長編小説や科学的解説文を読むことができるようになることを目指して基礎力が培われる。民話、童話、詩といったジャンルやプーシキンをはじめとする作家のプロフィールならびに時代背景についての知識も初等教育段階から身につけていく。基礎教育段階ではさらに冒険小説、推理小説、ファンタジー、ミステリーといったジャンルの文学作品に触れ、九学年修了時までには古代ルーシの民話から二〇世紀までのロシア文学の歴史についても学ぶ。一〇・一一学年ではドストエフスキー、トルストイ、ショロホフ、パステルナークなどの長編小説も教材にするが、単にテキストを読むだけでなく、作家の芸術的世界観を理解し批評することが求められるようになる。ロシア文学の古典はインターネット上の電子図書館にアクセスすれば誰でも無料で読むことができる。学校での文学の授業に活用できるホームページも豊富にあり、写真や動画を活用して創意工夫に溢れた文学の授業実践を行うことも可能になっている。

大学入試と短歌

いしかわひろこ
石川浩子
東京都立竹早高等学校

私は都立高校の国語科教師であるが同時に歌人のはしくれでもあり、かれこれ三十年近く短歌と関わってきた。学校で教える中で長く心にわだかまっていたことがあり、こうして文章を書かせていただいている。現代文の授業で扱う教材のほとんどは散文であり、詩歌を取り上げることにはなかなか無いのが現状だ。特に短歌は一般になじみがないせいもあり授業で取り上げる機会とはほとんどない。

しかし昨今の大学入試問題を眺めてみるに、予想以上に詩歌からの出題が多いことに気がついた。にもかかわらず授業で扱うことの少ない詩歌、特に短歌分野について現状の分析と授業で触れられない理由とを考えてみたくなった。以下に記すのはその覚え書きのようなものである。

*

若者の短歌人口が増えない。特に十代の作者に出会うことはまれだ。

そもそもわれわれが若者だった時代に比べて子供の数が相対的に減少しているのだから、単純に割合からいっても若い世代の短歌人口が増えるはずはないが、学校現場にいとそれだけでなく彼らの詩歌離れが加速度的に進んでいるのを感じる人が多い。現在の高校の国語教育の流れの中で詩歌を取り上げていく機会を作ることとはなかなか困難だ。ある程度の進学校であれば大学入試を意識し、限られた現代文の授業時間の中でどうしても評論や小説を多く扱わざるをえない。後で詳しく述べるが大学入試に詩歌関連の問題が出題されないわけではない。しかし活字離れがはなはだしい十代の彼らには、まず散文の読解から始めなければならぬ。詩歌の理解と鑑賞に時間

を割く余裕などないし、散文の読解の前にいきなり詩歌にいくのはハードルが高すぎるからだ。それに追い打ちをかけるようにいろいろ問題がある。

第一に二単位程度の現代文の授業では散文の「いろは」を学習させることに終始し、年間授業時数の中で詩歌にはなかなか辿りつけない。第二に教員の専門性からいっても詩歌を得意とする教員は少なく、教えるにくいこともありカリキュラムに組み込む機会が本当に少ないのが現状だ。第三にいいテキストが無い。教科書を始め副読本も詩歌を体系的に理解できるような構成にはなっておらず、教科書に数首の短歌が羅列されているにとどまっている。まれに短歌鑑賞のエッセイが載っていることもあるが、その数はかなり限定的だ。これらの要因が重なって、学校で詩歌を勉強する機会は極端に少なく、したがって興味関心を持つ生徒もいない。たいていは短歌と俳句の区別もつかないというのが普通だ。(よくあることだが、生徒は短歌を一句、二句と数えたりする。)

*

前段で触れた大学の入試問題について具

体的にデータで見えていくが、詩歌全体ではかなり膨大な量になるのでここでは短歌に絞り、また期間も最新の二〇一三年実施から遡ること十年に限った。直近の三年間について入手可能な首都圏の国公立大、私立大の主なもののはぼ見ることができた。また、二〇〇九年実施以前の問題については明治書院の『大学入試問題データベース』により検索可能なものをすべて集めた。

この三年間の主なものとして早稲田（文構）の塚本邦雄『歌の回復』からの詩歌論、東京女子大の穂村弘『短歌の友人』から（口語短歌の現在）、千葉大（教育）で同じく穂村弘の『短歌の友人』『短歌という爆弾』から、東京大（文科前期）の河野裕子のエッセー『たったこれだけの家族』の（ひとり遊び）、大阪市立大（商）の永田和宏の『もうすぐ夏至だ』から、早稲田（政経）の佐々木幸綱『人間の声―私説現代短歌原論』から（走者の志）（他者への信頼について）、大正大の北杜夫『青年茂吉』（あらたま時代）などを挙げるができる。塚本の『歌の回復』引用部分には具体的な短歌作品はないが、それ以外は作品に触れつつ、いずれも短歌の本質に迫る難しい内容である。

られる歌人としては斎藤茂吉が圧倒的に多く、その特徴は歌人以外の筆者による文章、たとえば哲学・宗教関係の著書や、ユニークなところでは芥川龍之介の茂吉論（宮城教育大、大阪大）がある。茂吉に関連して（正岡子規（アララギ）や（写真・写生・実相観入論）などが採り上げられることも多いが、それ以外のアララギ系の歌人が採り上げられることはめったにない。続いて多いのは石川啄木と与謝野晶子であるが、この二人は短歌作品よりも彼らが書いた評論、エッセイからの出題が目立つ。

概観すると、茂吉を始めとする代表的な近代歌人については、短歌の代表作と合わせて彼らが書いた評論、エッセイなどを読む必要があり、また年譜などを用いて彼らの人生と作品とがどのように関連しているかの理解も重要なので、副読本やプリント教材などで補っていく必要があろう。教科書の構成にもかなりの工夫がほしい。短歌は基本的に一人称の文学なので作品理解にはその歌人の生き様など全体像を知る必要がある。一般的な教科書にあるように一首及び二、三首の歌だけから作品の背景まで理解するには無理があり、その人となり

また二〇一三年実施の國學院（文）では北原白秋の歌集『桐の花』の序文「桐の花とカステラ」の全文からの出題であった。

大学の入試問題には大学側が受験する学生に何を求めているかというメッセージが込められている。たとえば二〇一二年実施の早稲田（文構）の問題では、塚本邦雄の詩歌論に藤原俊成の歌論「慈鎮和尚自歌合」の一部を並べ読ませている。塚本は現在詩歌が「歌う」ものから「読む」ものへと変化したことを確認し、今詩歌に求められているものは「志」を歌うことであると主張する。一方俊成の論は「歌は詠歌」であり「事のことわり」を言い切るものではないとする。この二者の主張を合わせ読ませ、その時代時代に詩歌が直面している課題を明らかにしつつ、詩歌の理想の姿を考えさせるといふ難問である。ここからは作問者の意図が明らかに感じ取れる。

また近年入試の世界でも人気の穂村弘についてであるが、東京女子大の『短歌の友人』で筆者は口語文脈のぎこちなさがかえって作品を人々の記憶に残るものにしていったという逆説を指摘しつつ、時代の要請と短歌作品との関係を考えさせる問題になっ

や作品世界を体系的に幅広く理解することが重要である。

短歌関連の文学史の出題は頻出で要チェックだが、それほど多岐にわたっている訳ではないので、ポイントさえ押さえておけば確実に得点できる問題が多い。中でも茂吉の歌集名、評論集名（『万葉秀歌』など）、代表作、所属結社名についてはかなりの頻度で出題されており、内容も選択肢のみならず記述もあるののでしっかり確認したい。続いて正岡子規、石川啄木、与謝野晶子、北原白秋、若山牧水と続くが、いずれも有名な代表作に限られるので押さえやすい。短歌史のおおまかな流れと代表的な歌人を知っておくことは、短歌の鑑賞やエッセイの理解にとっても有意義なことだ。

*

ここまで短歌に限って見てきたが、俳句や現代詩、詩歌論、古典作品（和歌関連）にまで広げていくとその量は膨大で、詩歌が決して看過していいジャンルではないことが分かる。にもかかわらず授業やクラブ活動などを通じて詩歌全般に触れることなく高校生活を終えていく生徒の多いことを残念に思う。

ている。問題を解きつつ受験生は「うた」とは何かという根源的な問いに直面していく。他にも特筆すべきは千葉大の問題であるが、穂村の文章の一部をあげて「よい短歌における重要な要素」や短歌における「リアリティ」について記述で答えを求めている。更に正岡子規の短歌の特徴を押さえつつ受験生に実際に短歌を作らせ、みずから解説させるといふ難問だ。いずれも内容的に文芸の本質の理解を問うような作問で、短歌のみならず詩歌の存在意義を理解する素養を求めているものと言えよう。

実に二〇一一年実施の入試は短歌関係の出題が例年になく多く、短歌が爆発した年でもあった。全体に短歌における音韻の重要性、短歌の文体と時代との関係、短歌の鑑賞についてなど問題の内容は多岐にわたり、それぞれが深い考察で難解である。これらの問題を初見で読み解いていくには、ある程度の短歌に関する基礎的知識と、詩歌の本質を理解する深い素養とが必要となる。

二〇一〇年実施以前については全国的なデータがあるが、特に関西、四国方面での短歌関連の出題が目立っている。採り上げ

その根底には感性や感情を理性や論理と対立するものと考え、詩歌を感性や感情という曖昧なものの表現の最たるものとして位置づけてしまう、現代の国語教育のゆがみがあるのではないかと考える。感性や感情という曖昧なものは採点や評価の対象にふさわしくなく、採点や評価自体が曖昧なものになりかねないという危惧を教員自らが強く意識しているように思える。

しかし本当にそうであろうか。感性や感情が理性に立脚していることは言うまでもなく、また詩歌（短歌）が感性や感情だけから成り立っているのではないことも明白だ。人の情動の深部に入り込み、繊細な言語感覚と凝縮された文体からなる美しい旋律を理解すること、詩歌の本質を理解する力が現在の国語教育には求められており、大学の入試問題での頻出がまさにそれを物語っているのではないか。入試問題の読解を通じて生徒の詩歌への興味関心が起るとすれば、それもまた一つの方法だと思いがとうであろう。われわれはいろいろな試みを生み出さなければならない。閉じていては何

北原保雄 著

日本語の助動詞——「二つの「なり」」の物語

A5判・上製・二五六頁
定価Ⅱ本体二九〇〇円＋税評者Ⅱ安部朋世
千葉大学教育学部准教授

本書は、筆者がこれまで学会誌等に発表してきた論文を中心にまとめた、古語「なり」についての研究書である。

筆者は「問題な日本語」シリーズの編者でもあるが、本書の内容はそれらとは当然異なり、用例の詳細な調査や考察から成る専門的なものである。しかし、

知的好奇心を大いに刺激される点は同じであり、一気に読み進めることのできる内容となっている。例えば、二章では、中古における「なり」の用例調査の結果、その分布が特徴的である

ことが明らかになる。その特徴は一体何を意味するのか…。このように、新たな調査結果が明らかにされ、緻密な考察が展開されていくことで、まるで、筆者とともに一歩一歩、論を構築しているような面白さを味わうことができるのである。

言語研究と学校教育はその目的も異なり、言語研究の成果がそのまま教育の現場に反映されるものではないが、言語研究とはどのようなものか、何より、言葉について考える面白さを実感できる一冊である。

井口守 著

一席二聴 落語で楽しむ古典文学

四六判・並製・二五八頁
定価Ⅱ本体一六〇〇円＋税評者Ⅱ丹野浩和
兵庫県高等学校退職校長
(元国語科教員)

作者は現役の高校国語教師。落語に興味を持ち、立命館大学の落語研究会当時から落語を執筆し、二〇〇四年、第五回大衆芸能脚本募集にて最年少で佳作を受賞、先日第六回上方落語台本募集で優秀賞に選ばれた。

高等学校の授業は概ね五分。この間に欠けを取り、クラスのスーパースターを感じ取り、やたら授業に入る。この「一席二聴」を授業で活用するには、落語であるから導入である「枕」がいるし、最後に「落ち」も必要である。実質は四〇分くらいで一

席口演し、その間に作品の何かを生徒に印象付けなければならぬ。それには登場人物は五、六人、原稿用紙で二五枚位のもの

が適当ではないかと思われる。本書の中には長い作品や人物関係の複雑なものも二、三あるが、上方弁やくだけた現代語で書かれ、若者にも分かりやすい。見立ても上手で、つい引き込まれて一気に読み終えてしまう。

しかし「落ち」は今の生徒には大分考えなければわからないものもあるのではないか。今後の一層の研鑽を期待している。

蒲合宏 著

敬語マスター——まずはこれだけ三つの基本

四六判・並製・一七六頁
定価Ⅱ本体一四〇〇円＋税評者Ⅱ佐藤理保子
長野県長野市立高等学校教諭

高校の国語の授業で敬語に触れる、となると一番多い機会は古典の授業ではないでしょうか。しかし、古典以前の問題として、生徒たちが敬語というものをしっかりと理解しているのか、そして日常的に敬語を正しく使っているのか、となるととても心もとなないのが現実（実感）です。

学校現場ではどうしても「理論」から入ってしまうがちな敬語指導。逆に言えば「理論」から入っていくという方法しか思いつかないのかもしれませんが。本書は「実際に敬語が使いこ

なせるようになる」ことに主眼を置き、「高くする敬語」「改まりを示す敬語」「恩恵を表す敬語」の三つの基本を軸として、

「必要なところで必要な敬語にすることで、徐々に敬語が使いこなせるようになる」ことを豊富な具体例とともに示してくれています。そして後半の実践編では、たっぷり実際の練習をすることが出来ます。

「実際に敬語を使う」という視点に立って敬語指導を行ってこなかった、ということに気付かれ、目を開かれる一冊です。

外山滋比古 著

国語は好きですか

2014年6月
刊行予定四六判・並製・一九四頁
予定価格Ⅱ本体一五〇〇円＋税

評者Ⅱ大井 悟

小学校からの英語教育がいよいよ本格化し、教科書のデジタル化も話題となるなど、教育現場の変化には著しいものがあります。そんな中、改めて「国語」の大切さを訴える本が登場しました。

テーマは「国語」、そして自国の言葉や文化を愛し大切に作る「文化的ナショナルリズム」。この主旋律が多様なテーマやエピソードを交えながら、バリエーションを展開していきます。国語と日本語の違いとは？ 縦書きと横書きをどう考える？ 敬語

教育のあり方は？ 日本語の正書法とは？ 小学校英語をどう考える？ …等々。

私自身は、日本語の「調べ」は五七調・七五調だけではない、とか、俳句の命は季語よりも「切れ」にある、といった話題に興味をそそられました。

日本の話す・聞く教育の現状については、「カゲもカタチもない。だいいちそんなことのできる先生がいない」とこき下ろされていて、耳の痛いところではあります。国語教師必読の一書といえましょう。